

山梨県中巨摩郡若草町

溝呂木道上第5遺跡(第Ⅱ地点)

2003

若草町教育委員会

山梨県中巨摩郡若草町

溝呂木道上第5遺跡(第II地点)

2003

若草町教育委員会

例 言

- 1 本書は山梨県中巨摩郡若草町十日市場 1147-2 外に所在する「溝呂木道上第 5 遺跡(第 II 地点)」の発掘調査報告書である。
- 2 発掘調査は主要地方道菲崎檍形豈富線建設に伴うものである。
- 3 溝呂木道上第 5 遺跡は、今回の調査と同じく、主要地方道菲崎檍形豈富線建設に伴い、平成 8 年度に発掘調査が行われ、平成 9 年に既に報告されているが(甲府市:1998b)、今回この平成 8 年度の調査地点を「溝呂木道上第 5 遺跡(第 I 地点)」と呼称し、今回の調査地点を同遺跡(第 II 地点)と呼称することとした。
- 4 調査は平成 10 年 4 月 20 日から平成 10 年 8 月 3 日にかけてを行い、実質調査日数は 58 日であった。
- 5 調査範囲は、平成 4 年 1 月に県教育委員会によって行われた試掘調査結果に基づき、実質調査面積は 802 m²(一部調査が 2 面にわたったため、のべ調査面積は 997 m²)であった。
- 6 調査は山梨県甲府土木事務所(現山梨県岐阜中地域振興局建設部)の委託を受けて、若草町教育委員会が主体となってを行い、田中大輔(若草町教育委員会社会教育課)が担当した。発掘調査に従事したのは以下の方々である。

飯室めぐみ・今村貞雄・小沢一枝・佐久間篤子・佐久間等・真道みゆき

鈴木政一・千野正雄・原田佳子・福島祥子・依田成美(敬称略・50 音順)

- 7 整理作業は平成 10 年度から断続的に行い、飯室・小沢・佐久間(篤)・真道・福島・原田・山本愛が参加した。
- 8 本書の編集・執筆は田中が行った。
- 9 本書に掲載した地図は、国土地理院発行 1/5,000 「甲府」・「駿沢」、若草町発行 1/10,000 「若草町全図」である。
- 10 発掘調査に伴う基準点の設置は(株)・漸調査設計に委託した。
- 11 本報告書に使用した航空写真的撮影は(株)フジテクノに委託した。
- 12 発掘・整理調査に際しては、以下の諸氏・諸機関にご教示、ご協力を賜った。記して謝意を表する次第である。(敬称略・50 音順)
石神(小林)孝子・出月洋文・大嵩正之・小野正文・小林健二・小林広和・(故)清水 博
鈴木 総・斎藤孝正・斎藤秀樹・中山誠二・畠 大介・平野 修・保阪太一・保坂康夫
三田村美彦・森原明廣・山下孝司
(財)山梨文化財研究所・山梨県埋蔵文化財センター
山梨県教育委員会学術文化財課
- 13 本書に関わる出土遺物ならびに写真・記録図面類は若草町教育委員会において保管している。

凡 例

遺構凡例

- 1 遺構の縮尺は全体図1／400、堅穴住居址・土坑1／40、竪・遺物出土状況微細図1／20、溝1／40・1／80を基本としたが、同一遺構中の平面図に対して断面図の縮尺を2倍としたものがある。
- 2 遺構断面図中の「279.5」等の数値は標高を表し、単位はメートルである。また同一遺構挿図中の水糸レベルは統一した。
- 3 挿図中の北方位はすべて国家座標に基づく真北である。磁北は6°10'西偏する。遺構図版は図版7を除き全て真北もしくは真東を上に組んだ。
- 4 遺構断面図において、基本上層はスクリーントーンで示したが、煩雑になる場合は省略した。これ以外に用いたスクリーントーン、ドットマークの凡例は、各々使用された挿図中に示した。
- 5 遺構半／断面図中の遺物について接合関係にある個体については各々を線で結び、遺物実測図を示した場合には遺物番号を付した。
- 6 本書においては、便宜上遺構名称に以下に示すような略称を用いた。分類基準は以下のとおり。

SI 堅穴住居址

P ピット(堅穴住居址等の遺構に伴う坑)

SD 溝 址(プランが溝状を呈するもの)

SK 土 坑(上に穿たれた穴で上記以外のもの)

- 7 本書においては、古墳時代～平安時代の調査面を第1面、弥生時代の調査面を第2面と呼称した。
- 8 堅穴住居址・土坑の形状で方形乃至隅丸方形としたものは、遺構の長辺と短辺の長さの差が10%以内のもの、長方形乃至隅丸長方形としたものは長辺と短辺の長さの差がそれ以上のものである。
- 9 遺構の名称は、種類別に確認順に付したものと基本とするため、その所属時期、位置とは無関係である。遺構番号を変更することによる整理調査時のミステイク、報告後の遺構原図・遺物の検索難を避けるため、あえて番号の並べ替え等は行わず、極力発掘調査時に最初に付した遺構番号を用いた。ただし、やむをえない場合に限り以下のとく遺構番号を操作した。

発掘調査時にSI09とした遺構は、整理調査時の検討から、住居址とするにはあまりに確証に欠けるため、SK29に変更に変更した。

発掘調査時に遺構プランが判然とせず、G・H-5・6区として、区(スクエア)名称を用いて取り上げた遺物は、発掘調査の進展によりSI05／SI06に含まれると判断されたため、本報告書ではSI05／SI06に含めた。

なお上記の如く遺構名称／番号の変更を行った場合でも、トレース・原稿執筆の直前まで旧名称／番号をもって整理調査を行った。したがって遺物への注記は取り上げ時のままである。

またSKの中で遺物が検出されなかつたものについては、発掘調査時に遺構番号を付さなかつたものがある。そうしたものについては、整理調査時に適宜遺構番号を付した。

遺物凡例

- 1 遺物の縮尺は全て1／3で示した。
- 2 図示した遺物は、遺構平／断面図中に遺物番号をもって出土位置を示した。調査に際しては極力全出土位置を記録するよう努めたが、遺物挿図中に図示してあるのに遺構平／断面図中に図示されていないものは遺構一括で取り上げた遺物である。
- 3 土器等回転体に近い遺物の実測に際しては四分割法を用い、遺物の右前半1／4を切り取った状態で作図し、左側1／2に外面、右側1／2に断面及び内面を記録した。また、残存状況によっては遺物の中心を算出し、180°回転して作図したが、この場合は中心線を一点鎖線で示した。また断面等を任意の回転で付した場合は点線で示した。
- 4 須恵器は断面を黒く塗りつぶし、自然軸はスクリーントーンで示した。灰釉陶器は断面にスクリーントーンを施して、施釉範囲を別のスクリーントーンで示した。また、平安時代の土師器に施されたスクリーントーンはタール等の付着範囲を示す。
- 5 回転体にならない遺物の実測に際しては三角投影法に準拠した図を示した。また、破片資料であるため推定径の算出不能な土器、及び折影図に關しても同様の作図に依った。
- 6 遺物の欠損部分の復元に際しては、補強を主目的とし、遺物の保持に必要な部分のみをエポキシ樹脂によって補填するに留めたが、山梨県埋蔵文化財センター主催『山梨の遺跡展'98』（平成11年3月13日～4月4日）に貸し出したSI07の遺物に關しては完全な復元を行った。
- 7 上坑(SK)出土の遺物で図示したものとのナンバーは、全出土土坑一括の通しナンバーとし、出土位置は各々の遺構図版に、遺物実測図は図版21に一括して掲載した。
- 8 遺物観察表において括弧で示した計測値は、推定値若しくは残存最大高である。
- 9 遺物観察表において「完形」とした遺物は、全く欠損・破損せずに検出されたもの、及び破損していても破片が一ヶ所に集中して検出され、接合作業の結果完存していることが判明したものとした。「接合して完形」としたものは同一遺構であっても異なる位置から出土した複数の破片が接合して完形となったものとした。
- 10 遺物の色調については、農林水産省農林水産技術会議事務局監修 財團法人日本色彩研究所色票監修『新版 標準上色帳』に準拠して付与した。
- 11 挿図中の遺物番号と写真図版、遺物観察表中の遺物番号は一致する。

本文目次

例　言

凡　例

日　次

第Ⅰ章　調査に至る経緯と経過 1

　第1節　調査に至る経緯 1

　第2節　調査の方法と経過 1

第Ⅱ章　遺跡の立地と環境 5

　第1節　地理的環境 5

　第2節　歴史的環境 5

　第3節　調査区の土層 7

第Ⅲ章　検出された遺構と遺物 8

　第1節　竪穴住居址(SI) 8

　第2節　溝(SD) 10

　第3節　土坑(SK) 11

　第4節　遺構外の遺物 11

参考引用文献

図版

報告書抄録

挿図目次

第1図 遺跡の位置	2
第2図 基本層序	7

表目次

第1表 土坑(SK)計測表	13
第2表 SI01 出土遺物観察表	14
第3表 SI02 出土遺物観察表	14
第4表 SI03 出土遺物観察表	14
第5表 SI04 出土遺物観察表	14
第6表 SI05・SI06 出土遺物観察表	14
第7表 SI07 出土遺物観察表	15
第8表 SI08 出土遺物観察表	15
第9表 土坑(SK)出土遺物観察表	15
第10表 遺構外出土遺物観察表	15

図版目次

図版1 溝柵区の位置と周辺の遺跡
図版2 溝柵区全体測量図
図版3 SI01測量図／SI01遺物実測図
図版4 SI01竪測量図
図版5 SI02測量図／SI02遺物実測図
図版6 SI03測量図
図版7 SI03竪測量図／SI03遺物実測図
図版8 SI04・SK03・SK17測量図／SI04遺物実測図
図版9 SI05測量図(1)
図版10 SI06測量図(1)
図版11 SI05測量図(2)・SI05竪測量図・SI06測量図(2)
図版12 SI05・SI06遺物出土状況(1)
図版13 SI05・SI06遺物出土状況(2)・同遺物実測図

- 図版14 SI07 測量図
- 図版15 SI07 遺物実測図
- 図版16 SI08 測量図／SI08 遺物実測図
- 図版17 SD01／SD02 測量図
- 図版18 第1面 SK 測量図(1)
- 図版19 第1面 SK 測量図(2)
- 図版20 第1面 SK 測量図(3)
- 図版21 第1面 SK 測量図(4)／SK 出土遺物実測図
- 図版22 第2面 SK 測量図
- 図版23 遺構外出土遺物
- 図版24 調査区遠景(南西より)
調査区全景(写真上方はほぼ真北に対応)
- 図版25 SI01(南より)
SI01 瓦(南より)
SI02(西より)
SI03(南より)
SI04(南より)
SI06(西より)
- 図版26 SI05(西より)
SI05 瓦(西より)
SI07(北より)
SI07 遺物出土状況(北より)
SI08(南より)
SD02(南より)
- 図版27 SI01 出土遺物
SK03 出土遺物
SI05 出土遺物
- 図版28 SI07 出土遺物(1)
- 図版29 SI07 出土遺物(2)
SI08 出土遺物
遺構外出土遺物

第Ⅰ章 調査に至る経緯と経過

第1節 調査に至る経緯

山梨県の計画する県道菲崎横形農富線の建設に先立って、県教育委員会は平成4年1月、埋蔵文化財の有無を確認するため試掘調査を実施した。その結果横形町から若草町にかかる延長約350mにわたって遺構・遺物が検出され、この部分については工事に先立って埋蔵文化財の記録保存が必要なことが明らかになった。そのため山梨県甲府土木事務所(現岐中地域振興局建設部)は、若草町教育委員会、横形町教育委員会の各々と調査委託契約を結び、平成8年度に若草町が溝呂木道上第5遺跡(第Ⅰ地点)、横形町が枇杷B遺跡の発掘調査をそれぞれ実施した。しかしながら、上記2遺跡(地点)の間に位置し、今回報告する溝呂木道上第5遺跡(第Ⅱ地点)分については、用地買収並びに既存建物の移転が進んでいたこともあり、平成9年度以降に発掘調査を行うこととした。

平成9年12月、若草町教育委員会は溝呂木道上第5遺跡(第Ⅱ地点)分について、平成9年度末には用地買収、既存建物の撤去が終了する旨、山梨県甲府土木事務所から連絡を受けた。そこで、若草町教育委員会、山梨県甲府土木事務所は平成10年3月、調査委託契約を結び、若草町教育委員会が主体となって、後述する日程で今回調査を行うこととなった。

第2節 調査の方法と経過

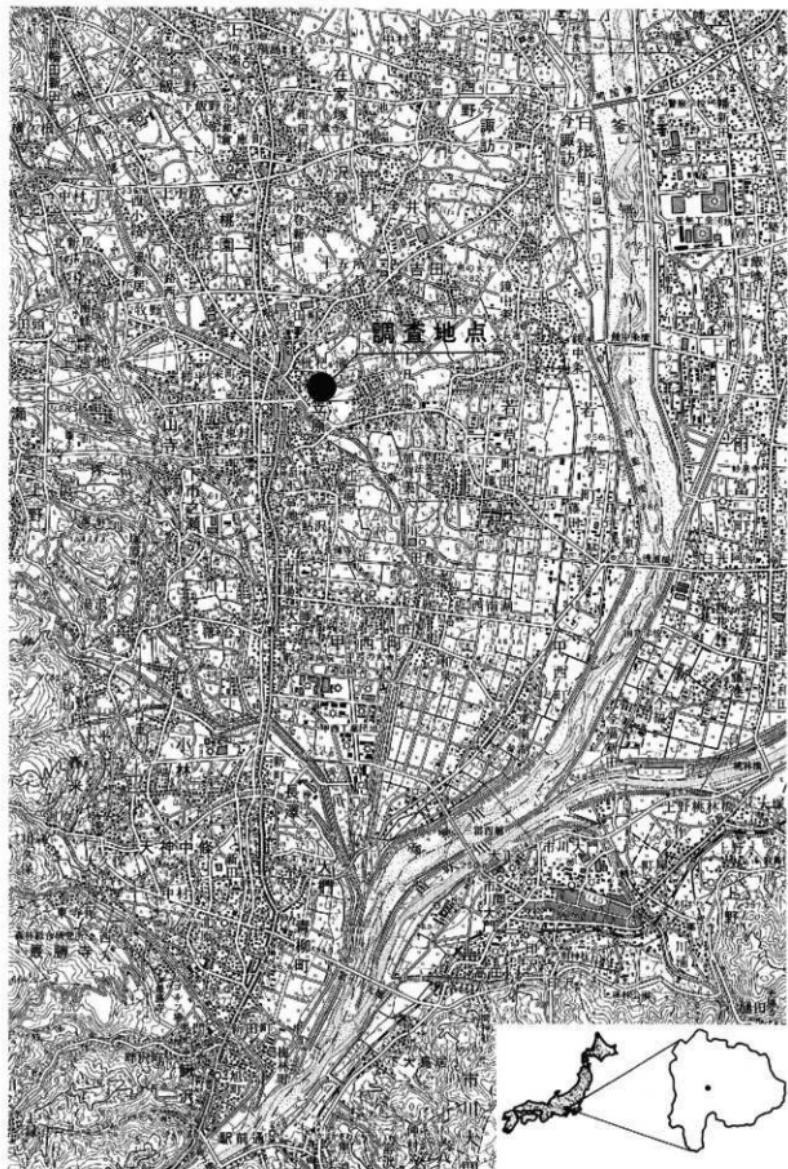
今回の調査は、県教育委員会の試掘調査結果を基に、平成8年度調査の溝呂木道上第5遺跡(第Ⅰ地点)、横形町枇杷B遺跡の間に位置する1,484 m²を対象に、平成10年4月20日から6月30日にかけて行う事とした。北東方向に伸びる調査区は、途中幅4 m程の既存道路に分断され、南西端付近では調査区南側に位置する倉庫へ、この倉庫を所有する企業のために物資搬入路を確保する必要から、調査区を3区に分けて、調査区北東端から上記既存道路までをⅠ区、既存道路から物資搬入路までをⅡ区、物資搬入路部分をⅢ区とし、Ⅰ・Ⅱ区の調査を同時にを行い、Ⅰ・Ⅱ区の調査終了後、既存道路部分及び物資搬入路部分の調査を行ふ計画をたてた。

しかしながら、Ⅰ・Ⅱ区を隔てる既存道路の下には掘方を含めれば幅4 m近いと推察される水路が埋設されていることが明らかになったため、Ⅰ区西端の掘削はこの埋設水路の掘方を検出した時点で終了し、既存道路部分の調査は行わないこととした。

またⅡ区北端付近は、現地表面から下、深さ4 m以上にわたって大きく搅乱されていることも明らかになったので、この搅乱の端部を捉えた時点で掘削を終了した。Ⅱ区はさらに、用地南側に上記した倉庫が近接して存在するため、安全を考慮し、南側では用地境界線から1 m内側に逃げて調査区を設定した。(他の辺は0.5 m逃げて設定)

Ⅲ区については、Ⅱ区調査の結果、Ⅱ区南西端付近から平成8年度の調査で検出された旧河道が検出され始めることから、Ⅲ区は全て旧河道上に設定されていることが推察されたため、調査期間等も考慮し、調査は行わないこととした。

従って、調査計画面積1,484 m²に対して、実質調査面積は802 m²となり、後述する弥生時代後期面



第1図 遺跡の位置

の調査を併せても、総調査面積は997m²に止まった。

調査に際してはグリッド法を用い、調査予定地をカバーするように国家座標第VII系を用いて5mメッシュを基本とするグリッドを設定した。従って5mメッシュの南北線は真北・真南に対応する。その際の基準点の設定並びに水準点の設定はGPSに依った。

5mメッシュの各線(ライン)の名称は、南北に走る線を東から西にA・B・C…とアルファベットで、東西に走る線を北から南に1・2・3…と算用数字で表し、それぞれA-ライン、B-ライン、1-ライン、2-ラインなどと呼称した。またそれぞれのラインの交点を(西へ並ぶアルファベット)-(南へ並ぶ算用数字)のように表して、A-1ポイント、B-2ポイントなどと呼称した。各区(スクエア)の名称はその区画の北東隅の名称をもってあてた。因みに本遺跡の仮想原点であるA-1ポイントの座標は、X = -43,480,000、Y = -2,230,000である。

なお、第I地点も同様の要領でグリッドを設定したが、ラインのナンバーは今回新たに独立して付与した。

調査はまずI区調査区間に沿ってトレンチを7箇所設定。遺構確認と基本層序の把握を行った。その後重機により表土を排除、以下人力により遺構確認作業を行った。

本遺跡の基本層序は扇状地特有の複雑な堆積状況を呈し、遺構の確認作業は困難を極めた。そのため遺構の確認に際しては適宜サブトレンチを設定してこれに対応した。また、遺構出土の遺物は原則として光波測量機に平板を併用して全点を記録した。遺構の測量に際しては主に平板を用い、竈の測量は簡易造方依った。

豊穴住居址の調査に際しては原則として四分割法を採り、2本の直交するセクションラインを設定、市松模様状に上層観察用のベルトを残して覆土を除去した。遺構プランの確認が困難な場合には遺構想定範囲周辺の確認面を遺物を取り上げつづける、遺構想定範囲に対して十文字にトレンチを設けるなどの措置をとって対応し、調査中も適宜サブトレンチを設けた。土層観察用のベルトは土層断面図を1/20で作成後取り除いた。遺構平面図は平板測量により、1/20で作成した。竈については簡易造り方を用いて測量し、平面図・断面図共に1/10で作図した。

土坑・ピットについては覆土を二分割乃至四分割し、土層を観察、または土層断面図を1/20で作成した後完掘した。平面図は平板測量によって1/20で作成し、必要に応じてエレベーション図を1/20で作成した。正し、土層の観察、平面図の作成後に土層断面図・エレベーション図の作成を行わず、遺構の出土レベルを記録してこれに替えた場合もある。

溝については、適宜遺構主軸に直交するように土層観察用のベルトを設け、覆土を除去した。土層観察用のベルトは土層断面図を1/20で作成後除去し、平面図を平板測量により1/40で作成した。

I区においては調査終了後F-4区(スクエア)南東隅にテストピットを設定し深堀を試みたが本テストピットから遺構・遺物の検出は見られなかった。

II区の調査もI区の調査方法に順じて行ったが、II区では調査区中央に設定した深堀トレンチからGL-2.4m、古墳後期～平安時代の確認面から0.8m程で焼土・炭化物を多く含む弥生時代後期の包含層を検出した。そのため、甲府土木事務所と協議の上、7月10日に古墳後期～平安時代面のラジコ

ンヘリによる空中撮影を行った後、Ⅱ区7-ライン以南、K-ライン以東について確認面を下げ、弥生時代後期の遺構検出を目指すこととした。その結果、後述するように弥生時代後期の堅穴住居址1軒、上坑7基を検出するに至った。

調査においては、古墳時代～平安時代の確認面を第1面、弥生時代の確認面を第2面と呼称した。

調査はこの第2面の調査に加え、梅雨の影響を大きく受けたこと、果樹栽培が盛んなこの地域の農繁期と重なり人員の確保が難しかったことなどが重なって、予定期間を大幅に超過し8月3日に全作業を終了した。

整理作業は平成10年度より断続的に行い、本報告書刊行に至った。

なおその間に本遺跡の出土遺物・遺構写真の一部は、若草町教育委員会主催「若草の遺跡展」(平成10年11月1日～11月3日)に展示、また山梨県埋蔵文化財センター主催「山梨の遺跡展'98」(平成11年3月13日～4月4日)のために貸出しを行った。

第Ⅱ章 遺跡の立地と環境

第1節 地理的環境

山梨県中巨摩郡若草町は、甲府盆地の西部、釜無川(富士川)の右岸に位置し、町域の東辺は釜無川に、西辺は御形山層から流下し釜無川に合流する澁沢川に画される。町域は日本有数の扇状地とされる御勅使川扇状地の扇尖から扇端部、及び釜無川の氾濫原を中心広がっており、町内に山地がなく町全体が極めて平坦であることが地形的特長といつてよい。

しかしながら、一見平坦に見える町域も御勅使川扇状地上に残る微地形や釜無川の沖積低地の他、澁沢川による御勅使川扇状地上の二次扇状地、土石流堆などの小扇状地上の微高地など、微視的にみれば更に幾つかの地形に分類することが出来る。

溝呂木道上第5遺跡(第Ⅱ地点)は、図版1に示した(12)にあたり(以下遺跡名のあとに付した番号は図版1に示す遺跡の位置に対応する)、若草町域の最西端に位置する。本遺跡北側から迫ってきた御勅使川扇状地は、本遺跡周辺で西側から押しだされてきた澁沢川による二次扇状地の下にもぐりこむ形で収束するため、本遺跡は御勅使川扇状地の最扇端に位置することになる。遺跡の南側には、澁沢川が南東に向かって流下し、澁沢川を附てた南側には、奈良時代の住居址等が検出された向第1遺跡(17)が占地する。澁沢川扇状地はこの向第1遺跡周辺を扇頂として、その扇を南東に広げながら発達し、若草町域の中央を南流する八糸川付近に達する。

翻って本遺跡を含む御勅使川扇状地の扇端は、白根町飯野の扇頂を中心として半径8km程の大きな円弧を描きながら町域を席巻する。扇状地の円周は町域北半で釜無川氾濫原と交錯し、せめぎあい、南流する釜無川の侵食によって南北に伸びる長い崖線を形成する。

遺跡は、御勅使川扇状地の扇端に位置するため、周囲には豊富な湧水が見られる。遺跡の南方200mには、三角池と呼ばれた若草町十日市場の湧水があり、遺跡の西側には枇杷ヶ池と呼ばれる湧水が存在する。遺跡周辺が御勅使川扇状地末端の湧水帯となっていることがわかり、この潤沢な水資源が安定的に遺跡集落の経営を支えたものと推察される。

第2節 歴史的環境

今回の調査では、後述するように弥生時代中期、後期及び古墳時代後期～中世に係る遺構・遺物が検出された。平成8年度に調査を実施した溝呂木道上第5遺跡(第Ⅰ地点)(13)では、弥生時代中期及び中世、今回の調査区の北側に近接して調査が実施された枇杷B遺跡(11・平成8年度御形町教委調査)からは、弥生～古墳時代前期、平安時代の遺構・遺物がそれぞれ検出されており、その立地に鑑みて同一遺跡と解されるこれら遺跡群の調査成果からは、この地に弥生時代中期以降途切れることなく連続と集落が營まれたことが明示される。而遺跡の調査成果を合わせれば、弥生時代中期以降中世まで、連綿と人間の営みの痕跡が確認されたことになり、扇状地末端部の湧水帯に支えられた豊かな住環境を想像することが出来る。

これら遺跡以外にも、御勅使川扇状地の末端に沿って帶状に包蔵地の存在が知られ、古墳時代後期・

奈良平安時代を中心とする集落に伴って腰帶具などが検出された新居道下遺跡(14)、本遺跡の滻沢川を隔てた南側に占地する向第1遺跡(17)などの調査が行われている。各遺跡とも集落の継続時期が相対的に長く、その多くが時代を跨って検出されており、ここに占地する遺跡群からは、弥生時代以降中世まで連続と人間の営為の痕跡を辿ることができる。

御勅使川扇状地のやや内側(扇尖)に入ると古墳時代前期及び平安時代の集落が発見された村前東八遺跡(3)・角力場第2遺跡(5)、守部村附第11・12・6遺跡(6~8)、同じく古墳時代後期の遺構が検出された前原G遺跡(4)があり、この辺りに古墳時代前期の遺構が濃密且つ広汎に分布することが明らかになります。特に村前東八遺跡からは、100軒を超える該期住居址が検出されており、古墳時代前期の拠点的集落として注目される。また村前東八遺跡の北側には、弥生時代後期の方形周溝墓群が検出された十五所遺跡(2)が占地する。加えて守部村附第6遺跡(8)からは、古墳時代中期の円形周溝墓が3基検出されており、岐阜地方の古墳時代の動向を探る上で注目される。

遺跡の滻沢川を隔てた南側に展開する滻沢川扇状地上の微高地には、古代末から中世にかけてこの地で勢力をもった加賀美氏の館跡と伝えられる古刹「法善寺」がある。また、古代末から近世の水田址と共に法善寺の塔頭であった「福寿院」関連の遺構が検出された二本柳遺跡(15・16)が調査されている。二本柳遺跡では特に、甲西バイパス地点(15)から中世の木棺が良好な状況で検出され、当時の葬送儀礼を検証する上で貴重な事例となった。滻沢川扇状地上には、この法善寺及びこれら遺跡を中心として条里型地割が広く遺存しており、現在でも中世的空間が色濃く残す町並みが見られる。

また、毎年2月10日、11日の両日、安養寺を中心として現在の県道蘿崎櫛形脇富線に沿って開かれる「十日市(若草町指定史跡)」は、その起源が中世に遡るとされる。甲府盆地に春を呼ぶ祭として知られる、この市が行われる県道部分は、御勅使川扇状地の南縁、滻沢川扇状地の北縁にあたり、このラインはいわゆる田方、原方の境界線に一致する。田方、原方それぞれの産物を各々の境界で交換した市の成り立ちを想起することが出来、ここでもこの地に中世的空间の色濃く残ることが知られる。

御勅使川扇状地の滻沢川を挟んだ南半には、微高地を中心として弥生時代中後期の小区画水田が検出された向河原遺跡(18)を始めとして油田遺跡(19)中川田遺跡(20)大師東丹保遺跡(21)などで水田址や祭祀跡が検出されている。特に大師東丹保遺跡からは洪水堆積物に埋没した古墳が壺型埴輪を伴って検出され注目を集めめた。

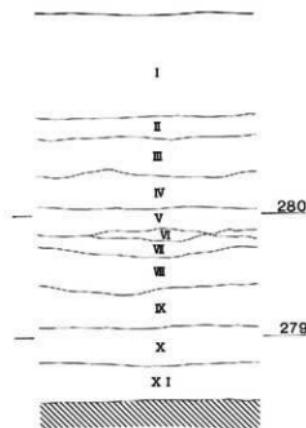
この他に近年、御勅使川・滻沢川扇状地及び沖積低地において油田遺跡を中心に溝呂木道上第5遺跡、村前東A遺跡等で、広汎に縄文最終末から弥生中期前半の遺物が出土しており、台地上から扇状地末端乃至沖積低地への進出という、稻作の開始と運動した遺跡の動態を探る上で今後調査事例の蓄積が期待される。また、これまで遺構の存在が確認されていなかった、釜無川の氾濫原において、御崎蔵入遺跡(10)の調査が行われ、平安時代の祭祀跡と共に近世の道状遺構や小橋、水田址等が洪水堆積物に被覆され、良好な状況で検出された。今後これまで遺跡の存在が認められていなかったこれら地域から新たな遺跡が発見される余地があり、注意を要する。

第3節 調査区の土層

調査区で検出された基本層序は第3図のとおり。

- 第Ⅰ層 砂礫と暗褐色土の混和層。所により填圧によって非常に縮まる。近年の擾乱層。
- 第Ⅱ層 暗褐色土。粘性あり。砂礫を含む。
- 第Ⅲ層 暗褐色土。砂礫を含む。
- 第Ⅳ層 暗黄褐色粘質土。砂礫少含。本層以下、再堆積ローム及び洪水堆積層となる。
- 第Ⅴ層 暗黄褐色砂質シルト。上層より色調暗い。
- 第Ⅵ層 粟粒～小豆大の砂礫層。暗黄褐色砂質シルト混入。
- 第Ⅶ層 暗黄褐色砂質シルト。
- 第Ⅷ層 暗黄褐色粘土層。粘性強い。
- 第Ⅸ層 黄褐色粘土層。粘性強い。含水多く縮まらない。
- 第Ⅹ層 暗褐色粘土。粘性強い。粟粒～小豆大の砂礫を多く含み縮まらない。
- 第Ⅺ層 黄灰色粘土層。粘性強い。粟粒～小豆大の砂礫を多く含み縮まらない。

第Ⅰ層は現代の擾乱上層で、所により第Ⅱ・Ⅲ層を割り第Ⅳ層に達する。また、第Ⅲ層中～第Ⅳ層上面にて、古墳時代～平安時代の遺構が確認できる。今回の調査では、第Ⅳ層上面を第1面の遺構確認面に定めた。同様に第2面、弥生時代の遺構確認面は、第Ⅺ層上面とした。



第2図 基本層序

第Ⅲ章 検出された遺構と遺物

第1節 積穴住居址(SI)

SI01

E-4Pointを中心検出され、切り合なく単独で存在する。形状は方形を呈し、規模は南北3.40m、東西3.70m、主軸N-35°-Wを測る。確認し得た深さは確認面から0.3m程度で、床面の標高は280.16mほどになる。床面は全体に硬化し、特に床面中央部には特に顕著な硬化面が確認できる。掘方を有さず、柱穴は確認できない。周溝は本址北東コーナー付近を除き全周する。

竈は本址北壁やや東寄りに1基構築される。竈は両袖、煙道が残り、遺存状態は良好である。内壁、煙道及び火床には顕著な被熱層が観察される。火床から煙道端までの長さは1.39m、両袖間の最大幅は0.85mを測る。袖は黄褐色粘土で構築され、竈左袖外側には、床面との比高15cm程度の台状の高まりが確認できる。

遺物は、竈周辺に僅かに検出されるに止まるが、その全てが甕類で、环等の出土は皆無であった。

SI02

E-4区において検出された。調査区内では切り合なく単独で存在するが、プランの南辺は調査区外にある。形状は方形を呈するものと推察され、規模は南北2.50m以上、東西2.80m、主軸をほぼ真東にとる。確認し得た深さは確認面から0.14m程度で、床面の標高は280.30m程度になる。床面は貼床が施され、貼床の厚さは最大0.07mである。床面は全体によく硬化する。柱穴・周溝は確認できないが、床面に貼床を切って穿たれたビットが5基確認できる。

竈はその大部分が調査区外にあり、調査区南壁際でわずかに左袖の北半のみが検出された。袖は黄褐色粘土で構築される。

遺物は小片が多く、わずかに4点を図示したのみである。

SI03

B-2区を中心に検出された。SD01に切られる。本址南側の大部分が調査区の外にあるため、本来の規模、形状等は明確にできないが、検出した本址北辺の長さは4.20m、確認面からの深さは0.35m、床面の標高は279.94mを測る。主軸はN-14°-Wあたりをとる。床面に貼床が施された形跡はなく、床面にさほど顕著な硬化面は見られない。周溝、ビット等も検出されない。

竈は北壁で1基検出された。焚口から煙道端までの長さは1.10m、火床の最大幅は0.42m、袖は黄灰色粘土で構築される。

遺物は、竈内で土師器甕片を数点検出した他はほとんど遺存しなかった。

SI04

I-7-8区において検出された。遺構の中心と西辺を溝状の搅乱に切られる。SK17と切りあうが、そ

の新旧関係は明確にしえなかった。規模は、検出できた東辺で2.75 m、確認面からの深さは0.15m、床面の標高は280.08 m程になる。主軸はほぼ真北をとり、床面には竪付近に顕著な硬化面が認められる。周溝は認められないが、不整形のピットが2基検出された。

竪は、搅乱に切られるため、その規模・形態を明確にできない。

遺物は、ほとんどが小片で、わずかに4点を図示したのみである。

SI05

G・H - 5区を中心に検出され、SI06を切って構築される。形状はやや不整な方形を呈し、規模は南北4.15 m、東西3.78 m、主軸N - 90° - Eを測る。確認し得た深さは確認面から0.25 m程で、床面の標高は280.12 mほどを測る。床面に顕著な硬化面は見られない。貼床が施された痕跡はなく、周溝は本址北東コーナー付近でのみ確認されるが柱穴は確認できない。

竪は本址東壁やや南寄りに1基構築される。竪は形状長円形を呈する皿状のPitとして検出され、内部に顕著な被熱層を有するものの、袖は造行せず、構築された痕跡も窺えない。炊口から煙道端までの推定長は1.13 m、火床の最大幅は0.65 mを測る。

この他、本址からはピットが5基検出された。P-1は隅の丸い長方形を呈し、床面からの深さは0.45mを測る。覆土の堆積状況から住居址に伴うピットとができる。P-2は、不整な楕円形を呈し、床面からの深さは0.03mを測る。P-3・P-4は楕円形を呈し、覆土には焼土が充填され、ピット底面には被熱した痕跡が認められる。さらにP-4には、床面との比高0.03 mほどの周堤状の高まりが認められる。覆土の堆積状況の観察から、これら2つのピットは、住居址の埋没途中に構築された可能性も指摘できる。P-5は住居址北東コーナーにあり、床面からの深さ0.18 mを測る。

検出された遺物は、小片が多く図示する遺物の抽出に苦慮するが、P-1内より接合して完形となる土師器杯と罐の羽口片が検出された。被熱したピットや縮羽口片の検出から、鐵冶関連遺物の検出に向け精査したが、鉄滓、スケール、金床石等はまったく検出し得なかつた。

SI06

G・H - 5・6区を中心に検出され、SI05に切られる。遺構の形状は方形乃至長方形を呈しするものと推察されるが、遺構の南東半分が調査区外にあるため、本来の規模・形態等は明確にできない。確認し得た規模は東西5.3 m以上、南北4.4 m以上、深さは確認面から0.33 m程で、床面の標高は279.98 m程になる。

竪は確認できなかつたが、周溝はほぼ全周し、周壁に沿って1.6~2.0 mごとに壁柱穴と思しきピット5基検出された。この他に、径1.1 m程度の不整円形、皿状のピットが5基、切り合いながら設けられていた。これら皿状のピット(P-1~6)覆土には焼土が充填された状態で検出された。ピット底面に被熱した痕跡は確認できなかつた。

SI07

M - 10区において検出された。調査区内では切り合なく単独で存在するが、プランの南東コーナー付近は調査区外にある。形状は隅丸長方形を呈するものと推察され、規模は南北1.75 m以上、東西2.23 m、主軸はほぼ真北を示す。確認し得た深さは調査区壁の観察から0.5 m程を測る。床面は全体に硬化し、遺構中心に向かって播鉢状に凹む。床周縁と中心との比高は、最大8 cm程になる。床面標高は、279.64 m ~ 279.72 mである。床には貼床が施された痕跡はないが、全体に顕著な硬化が認められる。

周溝は、所々途切れながら検出された。また検出した本址2つのコーナー両方においてピットを検出した。それぞれのピットは本址中心に向かって内傾して設けられる。ピットの底面に顕著な硬化はみとめられない。P - 1は床面から0.19 m、P - 2は床面から0.20 mの深さを有する。

調査し得た範囲では、竈は検出されなかった。床面や覆土に焼土炭化物の散布が見られず、通常住居址東壁に設けられる該期の竈の設置状況に鑑みれば、本址に竈が設置されなかった蓋然性は高い物と推察される。

本址からは、図示した遺物の内1~9の土師器杯、皿、灰釉陶器長頸壺が床面に遺棄されたような状態で検出された。10は床面から若干浮いた状態での検出である。

床面において1・2・8は正位で、7は逆位で、5の灰釉陶器は横位でそれぞれ検出された。3・4の皿と杯、5・6の皿と杯は、それぞれ床面に正位に置かれた杯の上に皿が正位に重ねられ、あたかも杯に皿で蓋をするような状態で検出された。杯と皿の間に顕著な内容物は認められなかった。1・2・3には、「貞」と読める墨書があり、7には、タール状に灯芯痕が3本残る。9の灰釉陶器壺は猿投産でO - 53窯式に比定される。

SI08

第2面、K - 8区を中心に検出された。SK24と切りあうが、その新旧は明確にできなかった。形状は隅丸長方形(所謂小判形)を呈するものと思われるが、東半を洪水流痕に切られ、南端部分は調査区に出るため正確な規模や形状は不明である。主軸長は4.5 m以上、検出した深さは確認面から1.15 m程を測り、床面の標高は278.62 mを測る。貼床等は見られず、床面に顕著な硬化面も見られない。

柱穴、周溝等は確認できず、炉址も本址を切る洪水流痕に破壊されたものと推察され確認できない。本址の遺物は非常に少なく、本址北壁端付近で図示した台付竈の脚部を検出した以外は、わずかな小片を探取したに止まる。

第2節 溝(SD)

SD01

B - 2区を中心に検出され、SI03を切る。両端が調査区外に逃げるため、本来の形態は不明だが、調査区内で検出した長さは、4.15 m、幅は0.45~0.60 m、深さは0.12 m程になる。主軸はほぼ真北をとる。底面標高は調査区北壁付近で280.12 m、SI03竈と重なる付近で280.16 m、調査区南壁付近で280.15 mとなり、顕著な傾斜は認められない。覆土は自然堆積で2層に分けられる。

遺物は、平安時代前半の所産となる土師器片が僅かに検出されたが、小片のため図示できなかった。

SD02

D - 4区からD - 5区にかけて、切り合ひなく単独で検出された。両端が調査区外ににげるため、本来の形態は不明だが、調査区内で検出した長さは、約13m、幅は0.60～0.75m、深さは0.15m程になる。主軸は、D - 3ポイント付近以南はN - 20° - E、以北はN - 12° - Wあたりをとり、やや蛇行しながら調査区を縦断する。底面標高は、調査区北壁付近で280.38m、D - 3ポイント付近で280.36m、調査区4 - ラインと交差する付近で280.31m、調査区南壁付近で280.28mとなり、南に向かって緩やかに傾斜していることがわかる。覆土は自然堆積で3層に分けられる。

遺物は、平安時代前半の所産となる土師器片が僅かに検出されたが、小片のため図示できなかった。

第3節 土坑(SK)

今回の調査で検出された土坑は29基を数える。第1面で22基、第2面で7基が検出されたが、いずれも壠塁柱建物址を想定するような規則的な配列は認められない。

第1面においては、K・L - 8・9区付近において隅方形～長方形の土坑の集中する傾向が見て取れる。第2面において検出されたSK29は、その形状からプラン確認時には、住居址と認識したが、覆土を除去した結果、明確な床面が検出できず、擂鉢状に窄まる周壁の状況、プランの大部分が調査区外にあることなどに鑑み土坑とした。

これらを含め検出された土坑の詳細については、第1表土坑計測表を参照されたい。

また、凡例にも記したが、土坑(SK)出土の遺物で図示したもののナンバーは、全出土土坑一括の通しナンバーとし、出土位置は各々の造構図版に、遺物実測図は図版21に一括して掲載した。

第4節 造構外の遺物

溝呂木道上第5遺跡(I地点)同様、弥生時代中期前葉の所産と思われる土器片が出土した。この他に、内面・外面・見込みそれぞれに花弁状の暗文を有する土師器杯などが見つかっている。また中世常滑焼甕片が出土しており、溝呂木道上第5遺跡(I地点)から常滑焼大甕や茶白が検出されたことと併せて注意される。

参考引用文献

- 小林健二他 1997 「大師東丹保遺跡Ⅱ・Ⅲ区」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第132集
- 清水 博 1998 「枇杷B遺跡」樹形町文化財調査報告書第17集 樹形町教育委員会
- 田中大輔 1998a 「角力場第2遺跡」若草町埋蔵文化財調査報告書第1集 若草町教育委員会
- 田中大輔 1998b 「溝呂木道上第5遺跡」若草町埋蔵文化財調査報告書第2集 若草町教育委員会
- 田中大輔 1999 「御崎藏入遺跡」『山梨考古』第74号 山梨県考古学協会
- 田中大輔 2001 「寺部村附第12遺跡」「山梨考古」第76号 山梨県考古学協会
- 中山誠二 2000 「二本柳遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第183集
- 新津 健他 1992 「二本柳遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第72集
- 新津 健他 1997 「大師東丹保遺跡Ⅰ区」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第131集
- 新津 健 2000 「宮沢中村遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第181集
- 広瀬和弘 1997 「村内遺跡」甲西町教育委員会
- 保坂和博 1997 「油田遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第130集
- 保坂和博 1997 「大師東丹保遺跡Ⅳ区」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第133集
- 三田村美彦他 1999 「村前東A遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第157集
- 宮沢公雄 2001 「寺部村附第6遺跡」山梨考古第83号 山梨県考古学協会
- 山下大輔他 2000 「前原G遺跡」樹形町文化財調査報告書第19集 樹形町教育委員会
- 米田明訓 1991 「七ツ打C遺跡発掘調査報告書」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第60集
- 米田明訓 1997 「向河原遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第129集
- 米田明訓 1998 「新居道下遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第147集
- 米田明訓他 1999 「十五所遺跡」山梨県埋蔵文化財センター調査報告書第158集
- 若草町 1990 「若草町誌」

番号	形状	長径	短径	深さ	底面傾高	覆土	遺物	調査面	切り合い	備考	図版番号
1	不整円形	1.42	0.93	0.32	280.10	覆土断面図参照	奈良時代	1	なし	底面凹凸に富む	18
2	円形	0.58	0.56	0.11	280.20	焼土炭化物多く含む		1	なし		18
3	楕円形	-	0.80	0.18	279.99	覆土断面図参照	楕円に図示	1	なし	擾乱により一部消滅	8・21
4	隅丸長方形	1.20	0.94	0.68	279.72	覆土断面図参照	奈良時代を主体とする	1	なし	突出し部あり	20・21
5	隅丸長方形	1.11	0.98	0.62	279.73	覆土断面図参照	奈良時代	1	なし	底面中央にピットあり	20・21
6	隅丸長方形	2.92	1.32	0.22	280.12	覆土断面図参照	椭円に図示	1	なし		20・21
7	不整円形	0.37	0.35	0.04	280.24			1	なし		19
8	楕円形	0.30	0.26	0.07	280.23	焼土炭化物多く含む		1	なし		19
9	楕円形	0.23	0.18	0.08	280.23	焼土炭化物多く含む		1	なし		19
10	円形	0.33	0.32	0.06	280.21			1	なし		19
11	円形	0.44	0.40	0.09	280.14			1	なし		19
12	円形	0.38	0.37	0.11	280.20			1	なし		19
13	円形	0.24	0.22	0.09	280.25	焼土炭化物多く含む		1	なし		18
14	円形	0.44	0.42	0.09	280.28	焼土炭化物多く含む		1	なし		18
15	円形	0.63	0.60	0.07	280.16			1	なし		18
16	円形	0.20	0.19	0.08	280.21			1	なし		18
17	不明	-	-	0.09	280.15			1	S104と切り合う	*新旧不明・一部調査区外	8
18	楕円形	0.57	0.41	0.15	280.16			1	なし		20
19	円形	0.46	0.45	0.12	280.27			1	なし		20
20	楕円形	0.40	0.34	0.08	280.27			1	なし		20
21	円形	0.32	0.30	0.09	280.26			1	なし		20
22	方形	1.00	0.92	0.22	280.17			1	なし		20・21
23	方形	0.54	0.52	0.04	278.46			2	なし		22
24	方形	0.53	0.50	0.04	278.39			2	S108と切り合う	*新旧不明	22
25	円形	0.49	0.44	0.12	278.82			2	なし		22
26	楕円形	0.50	0.37	0.06	278.89			2	なし		22
27	円形	0.36	0.34	0.19	278.71			2	なし		22
28	円形	0.49	0.49	0.09	278.90	張生後期付特甌		2	なし	一部調査区外	21・22
29	方形?	-	-	-	-						

第1講 計測表

遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	特徴等	備考
			口径	底径	高さ						
1	土器部	壺	11.1	7.2	9.3	口一側上半部 の1/4を欠く	縫めて包。最大 径10mm位の砂 粒多く含む。	良好	黒い黄褐色	口縁部アコナデ。全体部タ マ～不整な文字。内側部 ヨコナデ。底部木質斑。	外側部に深及び挺出物が断続的に付 着。
2	土器部	瓶?	(19.2)	—	(12.0)	口一側の 1/5を欠く	底。砂粒。赤色 粒子多く含む。	やや佳	褐色	口縁部ヨコナデ。内側ヨ コハケ。外側部タマハク。 内側部ヨコハケ。	
3	土器部	壺	(11.6)	—	(7.9)	口横部 の1/4	底。砂粒。赤色 粒子多く含む。	缺	褐色	口縁部ヨコナデ。内側ヨ コハケ。外側部タマハク。 内側部ヨコハケ。	

第2表 SI01遺物観察表

遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	特徴等	備考
			口径	底径	高さ						
1	土器部	杯	(10.0)	—	(3.7)	口一側の 1/4	縫合。赤色 粒子多く含む。	軟陶	暗～濃褐色	体部下半斜めヘラケスリ。	
2	土器部	杯	12.3	5.8	4.6	口一側の 1/3を欠く	縫合。マーブル 状。赤色粒子、鐵 砂多く含む。	良好	褐色	外側部に強いロクロヨコナデ。 体部下半斜めヘラケスリ。 底部木質斑。	
3	土器部	壺	—	(7.4)	(6.2)	底部1/4	底。砂粒。赤 色粒子多く含む。	良好	黒い褐色	外曲タマハケ。内側ヨコハ ケ。底部木質斑。	2次的に捲然し、破片により充満 する。
4	土器部	壺	—	—	(3.9)	破片	底。砂粒。赤 色粒子多く含む。	良好	黒い褐色	外曲タマハケ。内側ヨコハ ケ。	

第3表 SI02遺物観察表

遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	特徴等	備考
			口径	底径	高さ						
1	土器部	壺	—	(8.0)	(6.8)	底部1/4	やや粗。砂粒。鐵 砂多く含む。	良好	黒い褐色	外曲タマハケ。内側ヨコハ ケ。底部木質斑。	
2	土器部	壺	—	—	(8.3)	破片	—	良好	褐色	外曲タマハケ。内側ヨコハ ケ。	

第4表 SI03遺物観察表

遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	特徴等	備考
			口径	底径	高さ						
1	土器部	内底板	(15.0)	—	(3.6)	口一側の 1/3	縫合。赤色 粒子多く含む。	良好	黒い褐色	体部下半斜めヘラケスリ。 全体部状況又。	
2	土器部	杯	(11.8)	(5.2)	4.3	口一側の 1/3	縫合。砂粒。赤 色粒子多く含む。	良好	褐色	体部下半斜めヘラケスリ。 底部木質斑ヘラケスリ。	
3	土器部	壺	—	—	(4.6)	破片	やや粗。砂粒。鐵 砂多く含む。	良好	褐灰色～ 明褐色	外曲タマハケ。内側ヨコハ ケ。底部木質斑。	
4	土器部	壺	—	—	(5.4)	破片	やや粗。砂粒。鐵 砂多く含む。	良好	褐色	外曲タマハケ。内側ヨコハ ケ。底部木質斑。	

第5表 SI04遺物観察表

遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			残存率	胎土	焼成	色調	特徴等	備考
			口径	底径	高さ						
1	土器部	輪削片	7.7	—	(6.2)	輪削破片	底。赤色粒子 砂粒多く含む。	良好	黒い褐色	—	底面に落着物付着
2	土器部	瓶	13.8	5.6	2.5	口縁部の 1/3を欠く	縫合。赤色 粒子多く含む。	良好	褐色	体部下半斜めヘラケ スリ。	
3	土器部	杯	12.9	4.4	4.3	縫合して 溶接	底部。砂粒。赤 色粒子含む。	良好	褐色	体部下半斜めヘラケスリ。 底部表面剥離あり後外周 をヘラケスリ。	
4	土器部	杯	(14.8)	(5.6)	4.6	口一側の 1/3	やや粗。砂粒。赤 色粒子含む。	良好	褐色	体部下半斜めヘラケスリ。	
5	漆器部	蓋	(16.0)	—	(4.5)	口縁部の 1/3	縫合。砂粒含 む。	不良	灰褐色	内外面共ナデ形	口縁内面に火漆
6	漆器部	蓋	—	(12.0)	(5.9)	底部の 1/3	縫合。砂粒含 む。	良好	青灰色	内外面底部共ナデ形	
7	土器部	杯	13.9	—	(4.8)	底部を 欠く	底部。砂粒。赤 色粒子含む。	良好	褐色	体部下半斜めヘラケスリ。	

第6表 SI05・SI06遺物観察表

遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			残存率	鉄土	焼成	色調	調査等	備考
			口径	底径	高さ						
1	土師器	杯	12.0	4.4	3.6	完全	黒褐色、砂粒・赤色を含む。	良好	褐色	体部下半部焼けハラケズリ。底部全周へラケズリ。	口縁部に薄く焼付痕。外鉄部1ヶ所に墨書き「日」。
2	土師器	杯	12.5	4.4	4.5	完形	やや粗。砂粒。	良好	明黄褐色	体部下半部焼けハラケズリ。	外鉄部1ヶ所に墨書き「日」。
3	土師器	口	13.5	4.9	3.8	完形	やや粗。砂粒・赤色を含む。	良好	褐色	体部下半部焼けハラケズリ。	外鉄部1ヶ所に墨書き「日」。
4	土師器	杯	12.6	3.9	4.7	完形	やや粗。砂粒。	良好	褐色	体部下半部焼けハラケズリ。	外鉄部1ヶ所に墨書き「日」。
5	土師器	口	12.3	—	2.7	完形	やや粗。砂粒・赤色を含む。	良好	褐色	体部下半部焼けハラケズリ。	底部全周に炭化物付着。内鉄部に墨書き「日」。
6	土師器	杯	12.4	4.8	4.1	ほぼ完形	やや粗。砂粒・赤色を含む。	良好	褐色	体部下半部焼けハラケズリ。	外鉄部1ヶ所に墨書き「日」。
7	I 鋼器	杯	12.7	4.2	3.3	完形	やや粗。砂粒・赤色を含む。	良好	灰褐色	体部下半部焼けハラケズリ。	外鉄部1ヶ所に墨書き「日」。
8	I 鋼器	口	12.0	2.5	2.6	底付トノサマ10 年を文ぐ。	やや粗。砂粒・赤色を含む。	良好	褐色	体部下半部焼けハラケズリ。	底付全周へラケズリ。
9	灰陶陶器	蓋	11.3	8.1	22.3	口縁部の 隙を全く なくす。	赤、黒褐色を黑色 子と白子と含む。	良好	灰白色	付三苔。底付下半部焼けハラケズリ。	鉄丸は灰オーリーブ色で先尻丸み。 鉄部に1ヶ所ヘラ状の工具痕。
10	土師器	蓋	12.2	5.5	2.7	縦縫して はぶた形	黒褐色。赤色粒子を含む。	良好	褐色	体部下半部焼けハラケズリ。	底付全周へラケズリ。

第7表 SI07出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			残存率	油L	焼成	色調	調査等	備考
			口径	底径	高さ						
1	陶生土器	口付壺	—	7.7	(9.0)	脚部が 二重	直窓。妙粒多く含む。	良好	褐色	外鉄部斜めハラケズリ。外鉄部タハケズリ。内鉄部ヨコハケズリ。鉄部内凹コナテ。	鉄丸は灰オーリーブ色で先尻丸み。

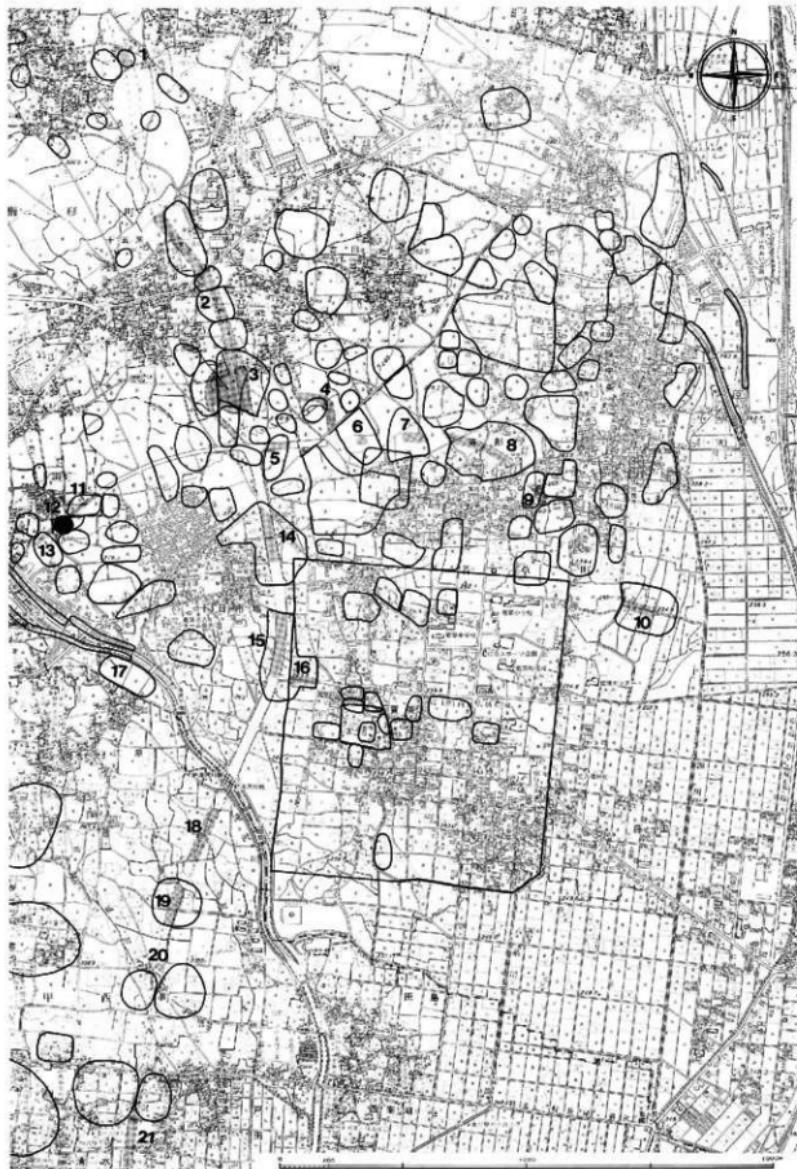
第8表 SI08出土遺物観察表

遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			残存率	鉄土	焼成	色調	調査等	備考
			口径	底径	高さ						
1	陶生土器	口付壺	—	7.7	(9.0)	脚部が 二重	直窓。妙粒多く含む。	良好	褐色	外鉄部斜めハラケズリ。外鉄部タハケズリ。内鉄部ヨコハケズリ。鉄部内凹コナテ。	鉄丸は灰オーリーブ色で先尻丸み。
2	灰陶陶器	蓋	(12.6)	(6.6)	4.7	口一底の 1/2	褐色。表面 に白色粒子を含む。	不良	灰青色	底部斜面を切り未調整	裏部に墨書き「日」、「家」?
3	灰陶陶器	杯	(12.6)	(6.6)	3.7	口一底の 1/3	やや粗。被覆 層白色。白色 粒子を含む。	良好	灰→浅灰色	底部斜面を切り未調整	内外面に火燐
4	灰陶陶器	杯	—	(8.0)	(3.9)	底部の 1/2	やや粗。被覆 層白色。白色 粒子を含む。	良好	灰→浅灰色	底部斜面を切り未調整	
5	灰陶陶器	蓋	(19.0)	—	(15.7)	口一底上 1/4	やや粗。粒 子多く含む。	良好	褐色	口縁部ヨココナテ。外鉄部タハ ケズリ。外鉄部上端コロコロ。向 下斜面にタハケズリ。内鉄部 ヨコハケズリ。	
6	灰陶陶器	蓋	—	—	(3.4)	体部の 1/3	直窓。表面 に白色粒子 と白粉を含む。	良好	灰白色	体部上半部焼けハラケズリ。	
7	灰陶陶器	蓋	(16.3)	—	(2.1)	口縁部の 1/5	直窓。表面 に白色粒子 と白粉を含む。	良好	灰白色	ロクロヨココナテ	
8	鉄製品	片手鎌	(4.1)	(0.6)	(0.6)	被片	—	—	—	—	計測値は既長・既高・既厚
9	鉄製品	刀子	(6.5)	(2.1)	(0.4)	被片	—	—	—	—	計測値は既長・既高・既厚

第9表 土杭(SK) 遺物観察表

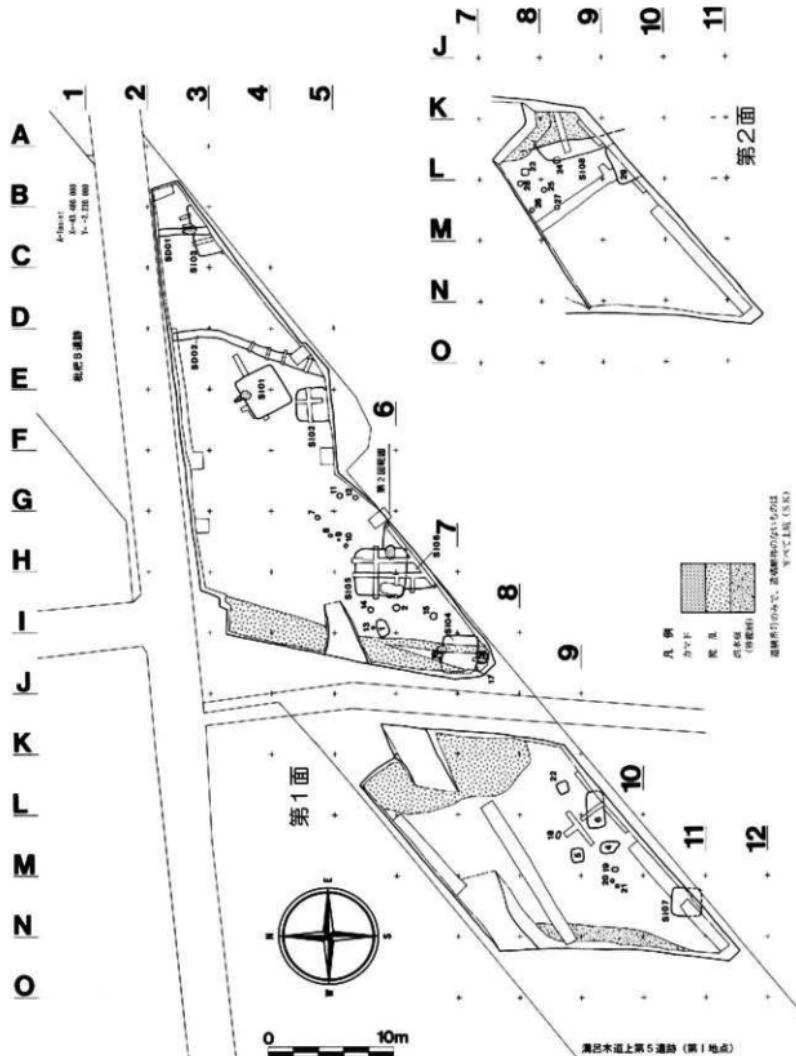
遺物番号	種別	器種	計測値(cm)			残存率	鉄土	焼成	色調	調査等	備考
			口径	底径	高さ						
1	陶生土器	瓶	—	—	(6.6)	被片	やや粗。妙粒多く含む。	良好	明黄褐色	外鉄部直文。内鉄部ナデ	
2	陶生土器	蓋	—	—	(4.6)	被片	—	良好	灰褐色	外鉄部直文。内鉄部ナデ	
3	陶生土器	瓶	—	—	(5.3)	被片	やや粗。妙粒多く含む。	良好	明黄褐色	外鉄部直文。内鉄部ナデ	
4	陶生土器	蓋	—	—	(5.2)	被片	—	良好	灰褐色	外鉄部直文。内鉄部ナデ	
5	陶生土器	蓋	—	—	(2.3)	被片	—	良好	灰褐色	外鉄部直文。内鉄部ナデ	
6	陶生土器	蓋	—	—	(2.2)	被片	—	良好	灰褐色	外鉄部直文。内鉄部ナデ	
7	陶生土器	蓋	—	—	(3.6)	被片	—	良好	明黄褐色	外鉄部直文。内鉄部ナデ	
8	陶生土器	瓶	—	—	(2.6)	被片	—	良好	褐色	外鉄部直方形羽状沈線文。内 鉄部ナデ	
9	土師器	杯	(14.8)	(10.9)	(3.3)	口一底の 1/4	やや粗。被 粒多く含む。	良好	褐色	外鉄部直文。内鉄部。見込みに子 孫文。外鉄部直文。内鉄部ナデ	
10	瓦	瓦	—	—	(10.2)	被片	やや粗。被 粒多く含む。	良好	灰褐色	外鉄部直文。内鉄部。見込みに子 孫文。外鉄部直文。内鉄部ナデ	常滑法

第10表 遺構外出土遺物観察表



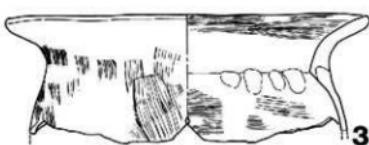
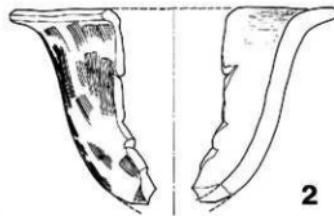
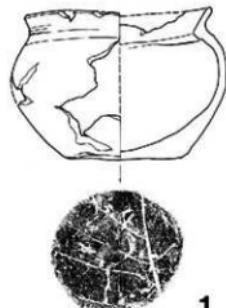
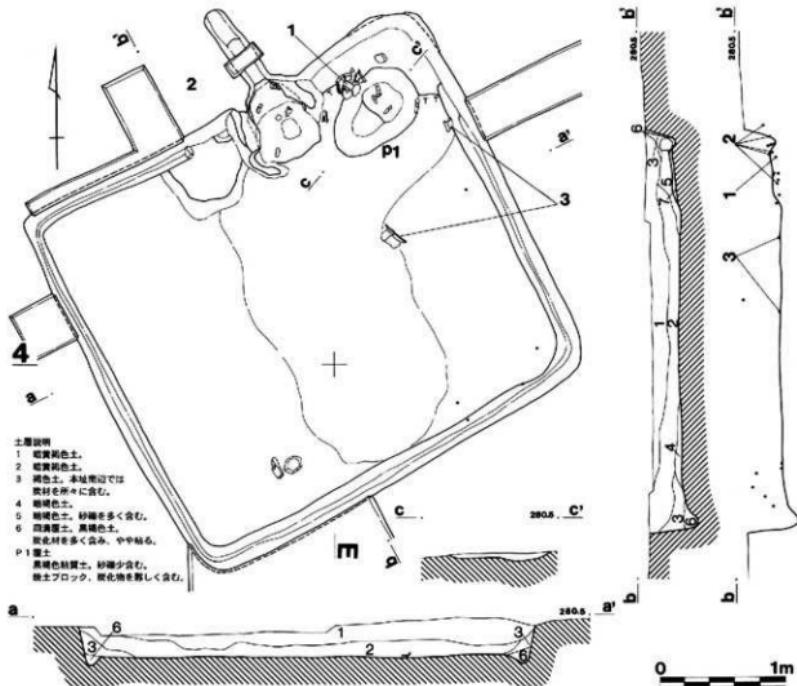
調査区の位置と周辺の遺跡

図版2



調査区全体測量図

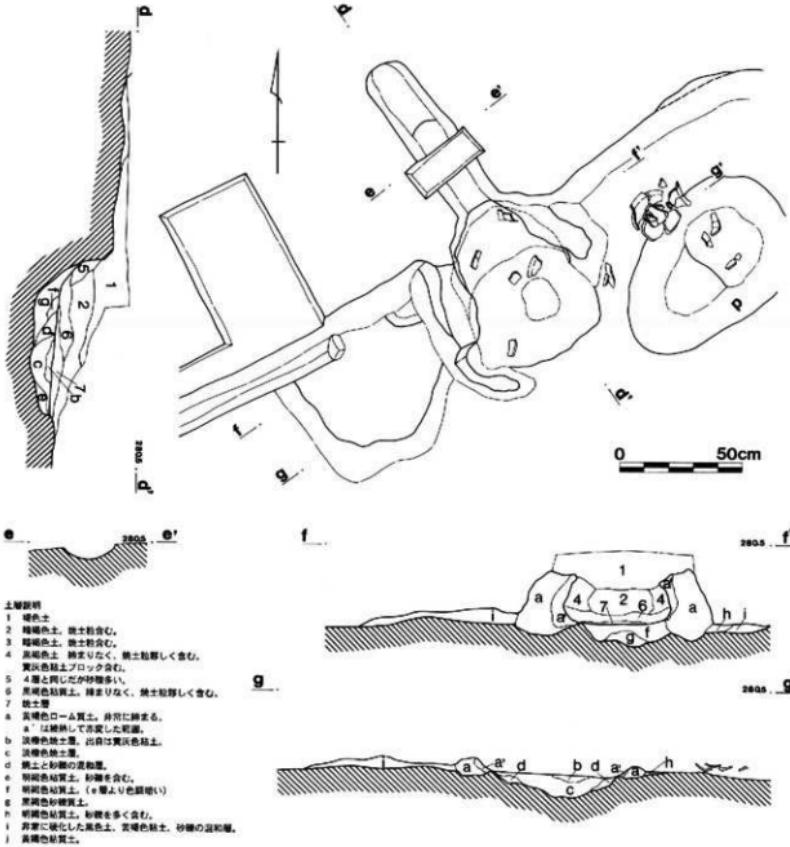
図版3



0 10cm

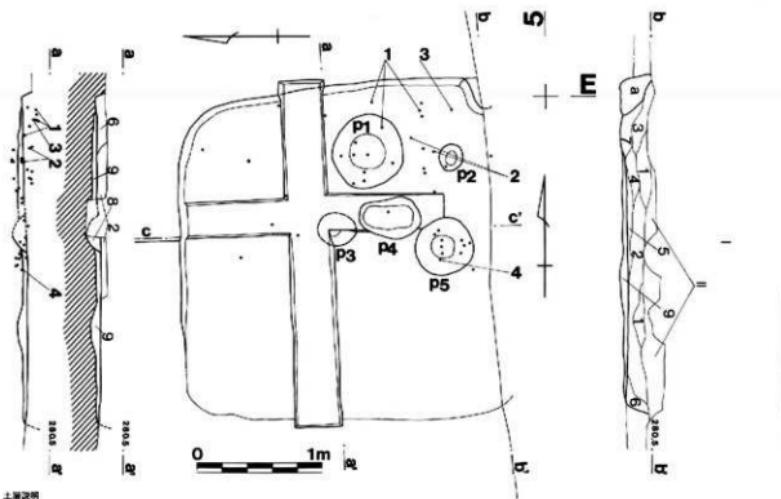
SI01 測量図 / SI01 遺物実測図

図版 4

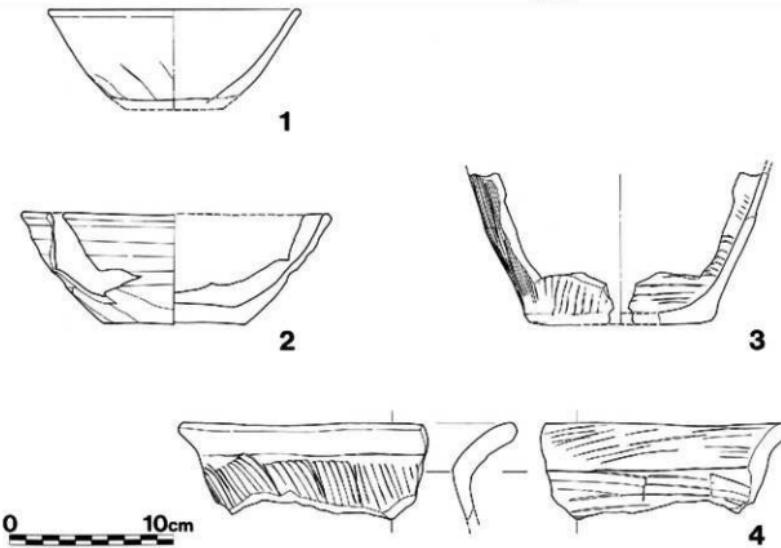


SI01 察測量圖

図版5

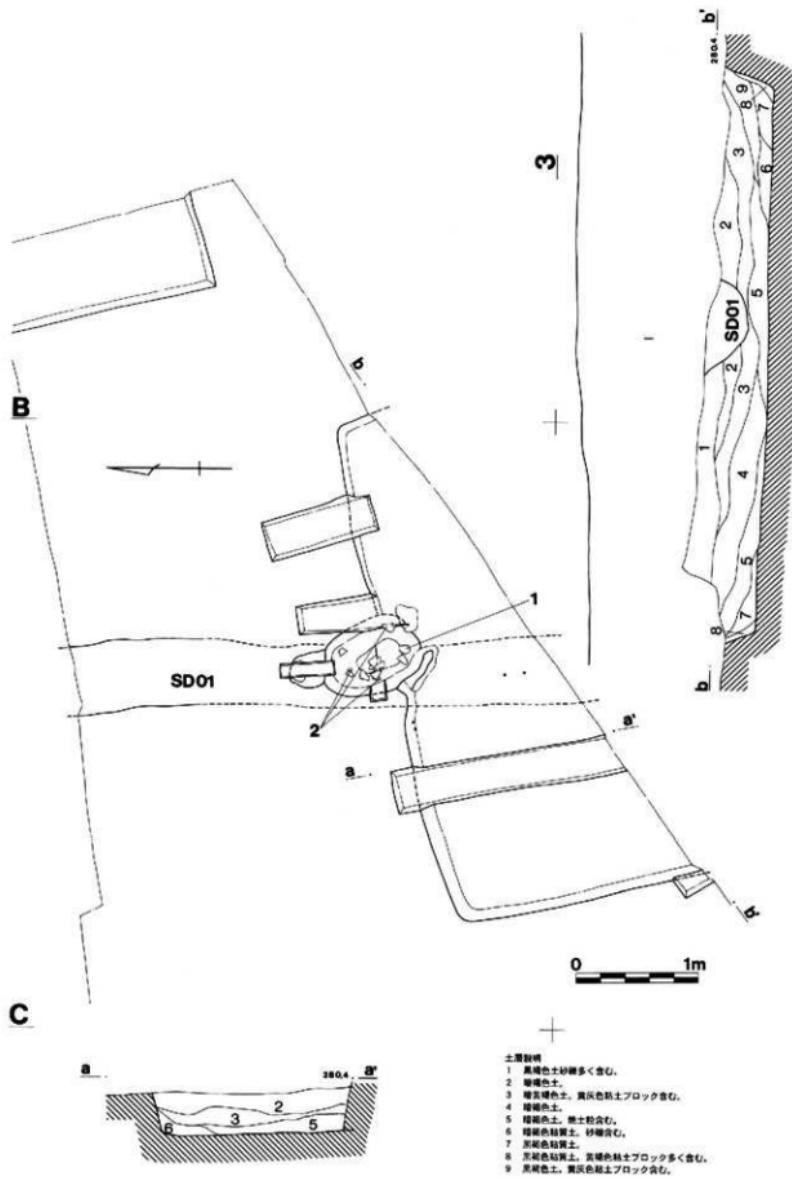


- 上層次明
 1 黄褐色土。
 2 暗褐色土。
 3 暗棕褐色土。
 4 棕色土。黄灰色粘土ブロック含む。
 5 暗褐色土。粘土粒・黄灰色粘土ブロック含む。
 6 暗褐色土。
 7 暗褐色粘質土。粘土ブロック多く含む。
 8 暗褐色粘土。砂質粘土。砂礫多く含み挟まらない。粘土少含。
 9 粘土。暗褐色粘土。砂粒あり。黄灰色粘土ブロック頻繁に含む。
 a 黄褐色粘土。黄褐色粘土。細砂に挟まる。

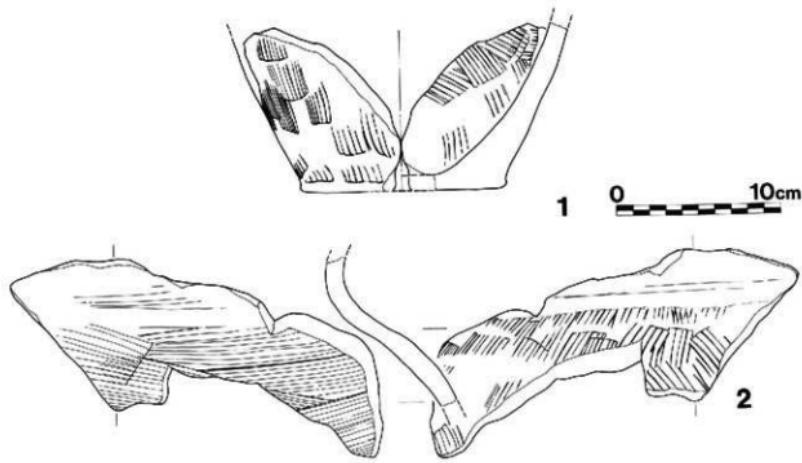
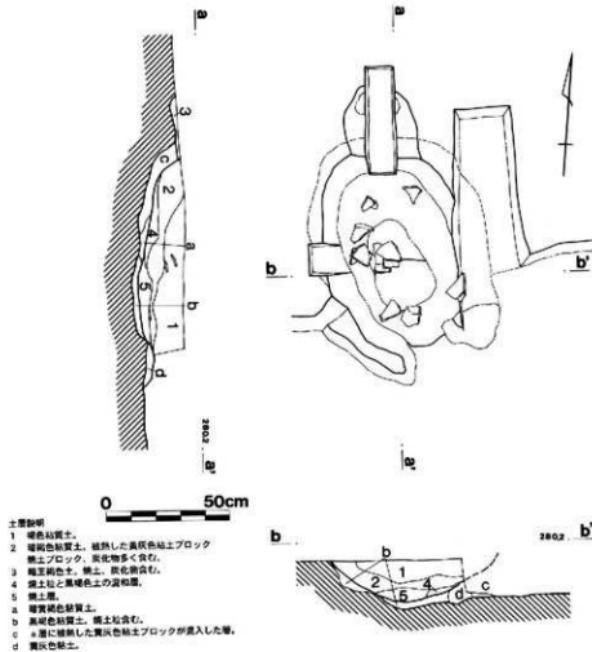


SI02 测量図 / SI02 遺物実測図

図版6

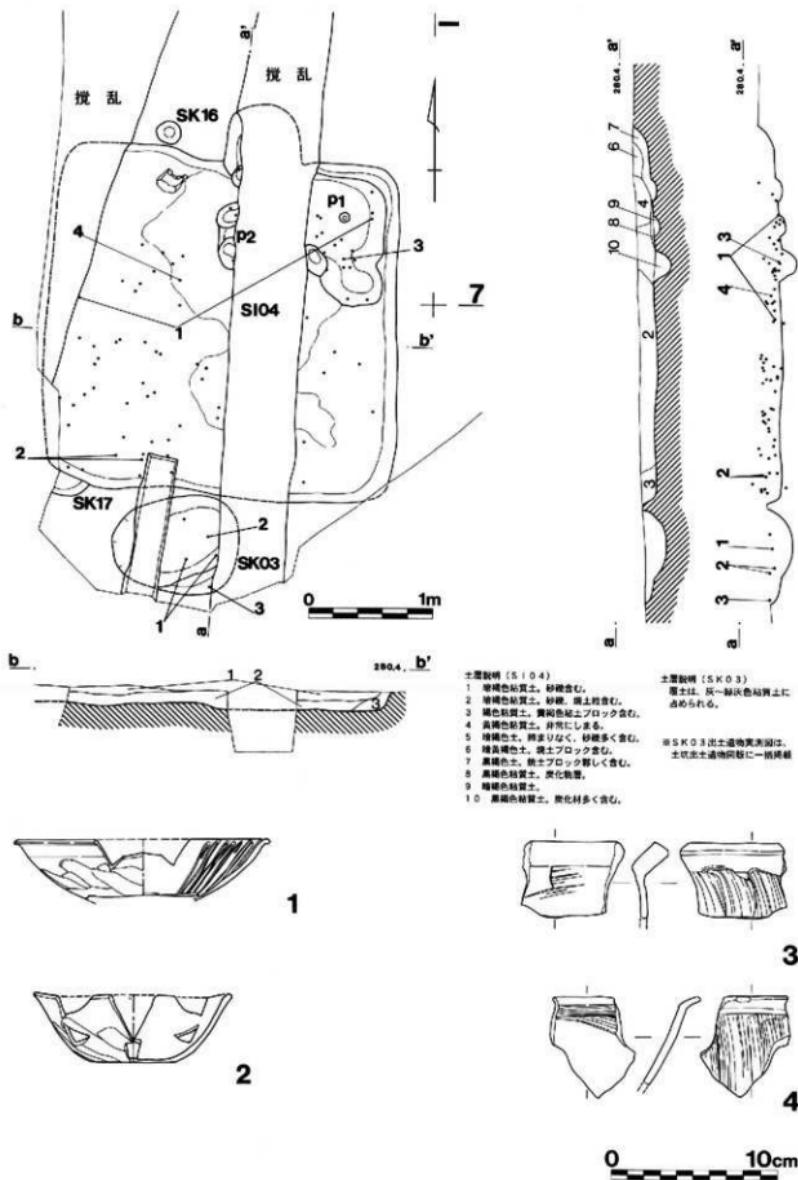


SI03 測量図

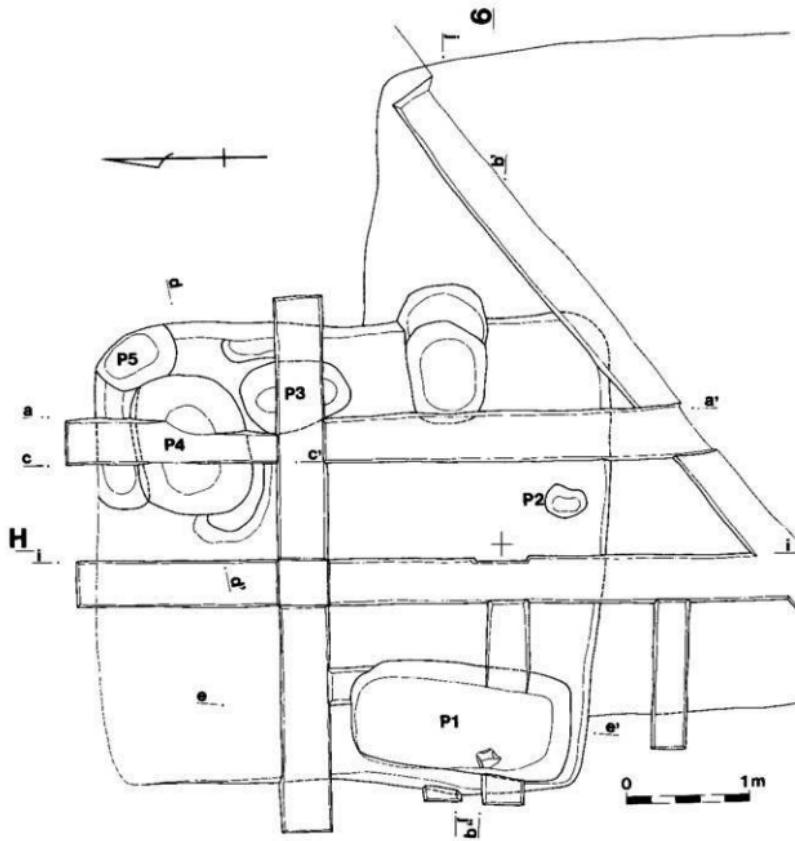


SI03 立面測量図 / SI03 遺物実測図

図版8

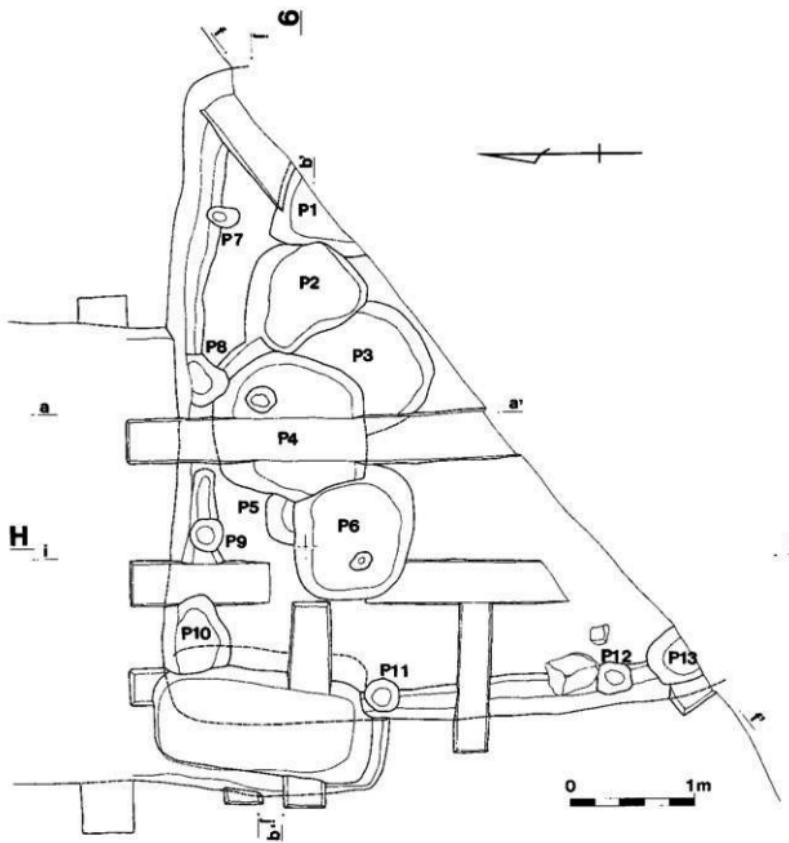


SI04・SK03・SK17測量図／SI04遺物実測図



SI05 测量図(1)

図版 10



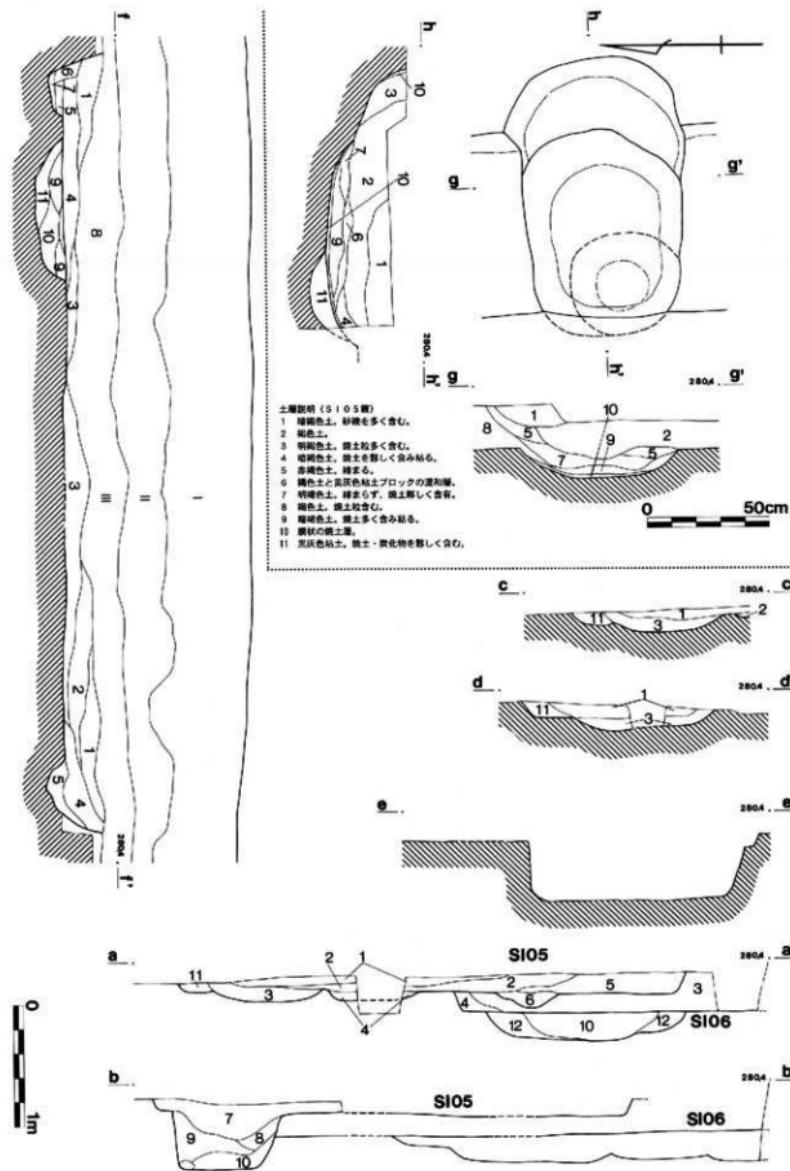
土壤説明 (SI05)

- 1 砂褐色土。砂礫含む。
- 2 黒褐色土。燒土ブロック・炭化物多く含む。被まらない。
- 3 明褐色土。燒土ブロック・炭化物少く含む。
- 4 明褐色土。燒土ブロック・炭化物多く含む。
- 5 黑褐色土。
- 6 黑褐色土。
- 7 砂褐色土。砂礫含む。
- 8 黑褐色土。黄褐色の焼土ブロック含む。
- 9 黑褐色土。黄褐色の焼土ブロック多く含む。
- 10 黑褐色土。
- 11 陶器土。褐褐色土。黄褐色化土ブロック含む。

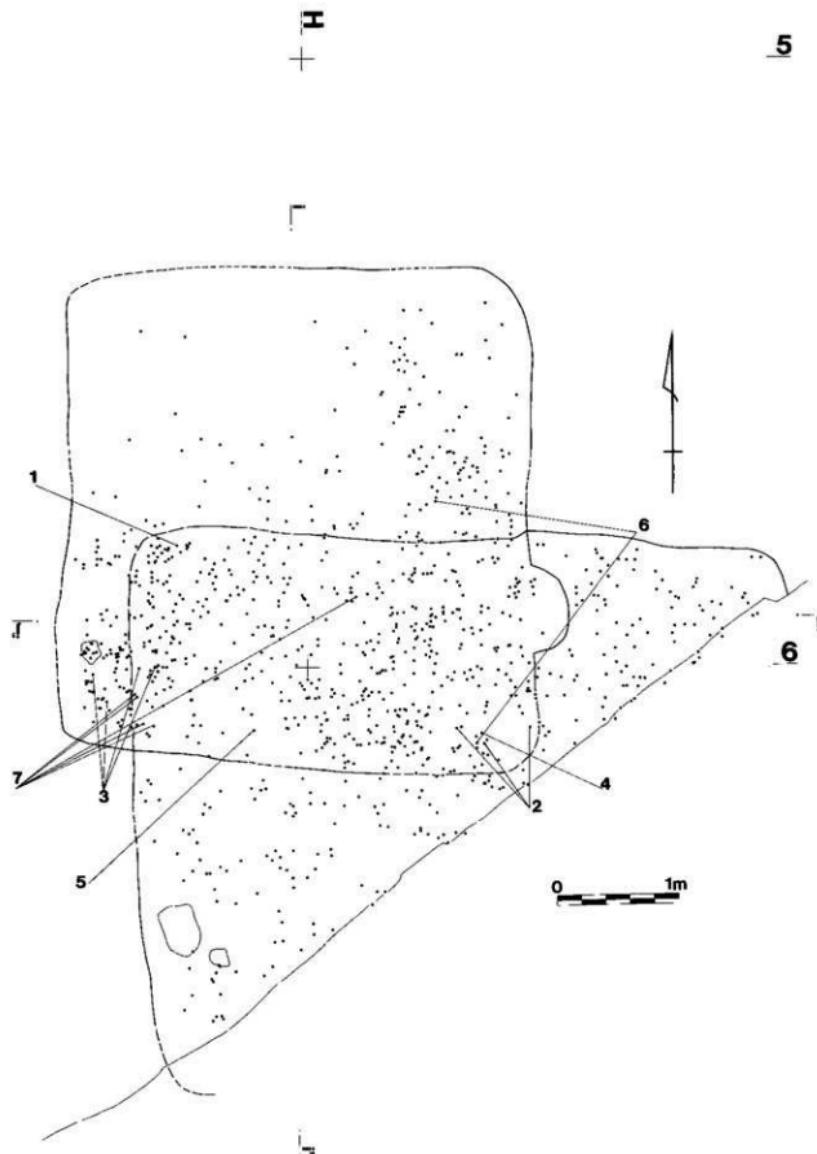
土壤説明 (SI06)

- 1 黑褐色土。砂礫含む。
- 2 1と同様だが、色や結構で焼土粒含む。
- 3 黑褐色土。被まらない。
- 4 黑褐色土。被まらない。黄褐色の焼土ブロックを含む。
- 5 黄褐色の焼土。燒土多く含む。
- 6 黄褐色の焼土。
- 7 反白色粘土。燒土粒含む。
- 8 黄褐色の粘土。被まらない。
- 9 黄褐色の粘土。燒土粒多く含む。
- 10 棕褐色土。被まらない。炭化物・燒土ブロック鮮しく含む。
- 11 黄褐色の粘土。被まらない。燒土粒多く含む。
- 12 褐黃褐色土。燒土粒ブロック・炭化物多く含む。

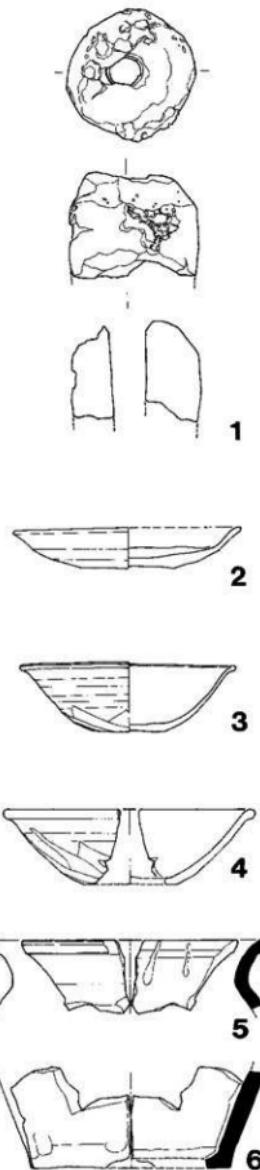
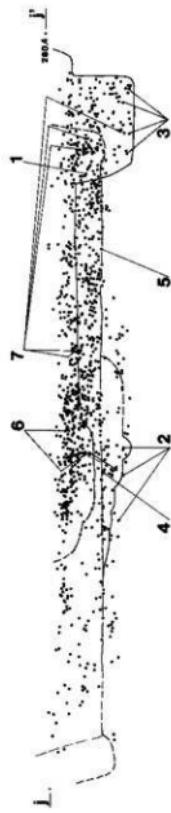
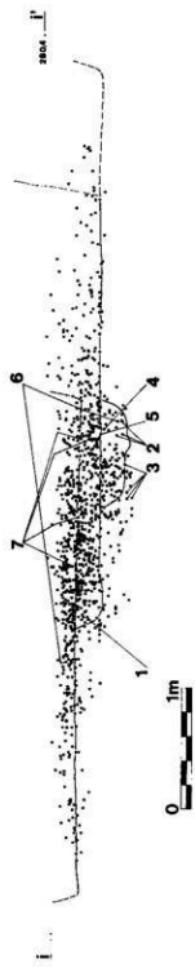
SI06 測量図(1)



SI05 測量図(2)・SI05 対測量図・SI06 測量図(2)



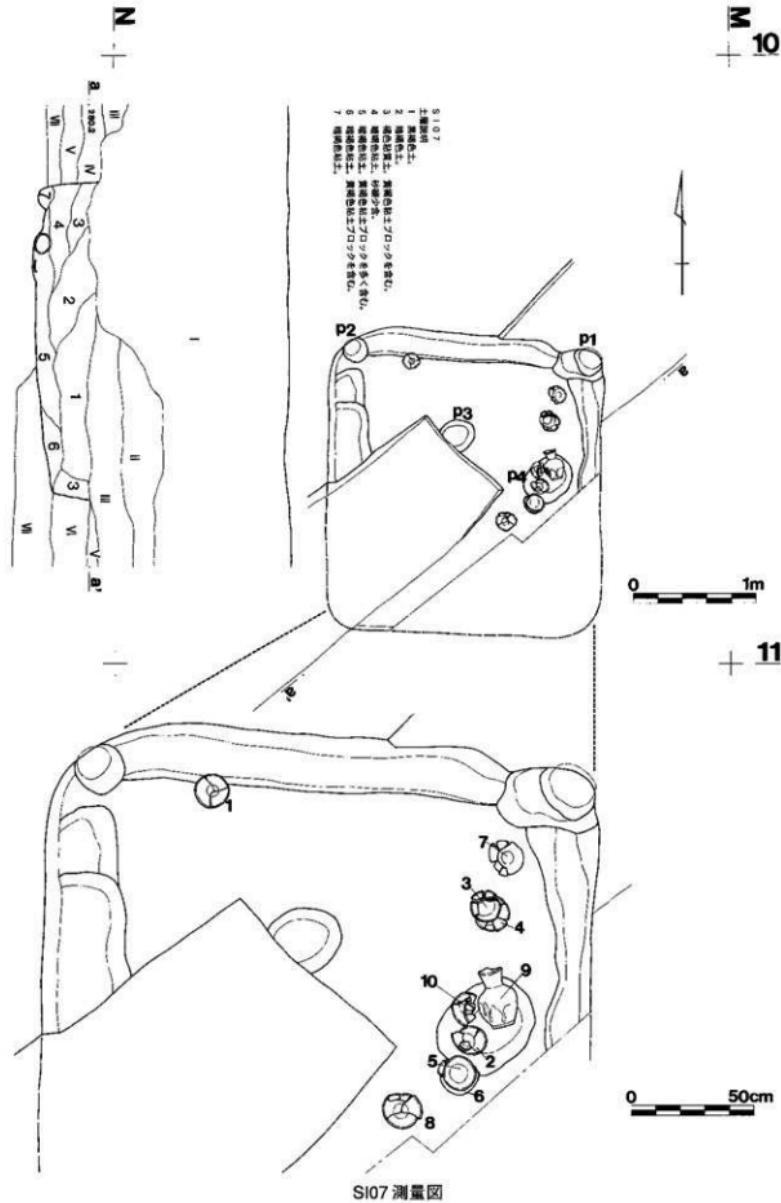
SI05・SI06 遺物出土状況(1)

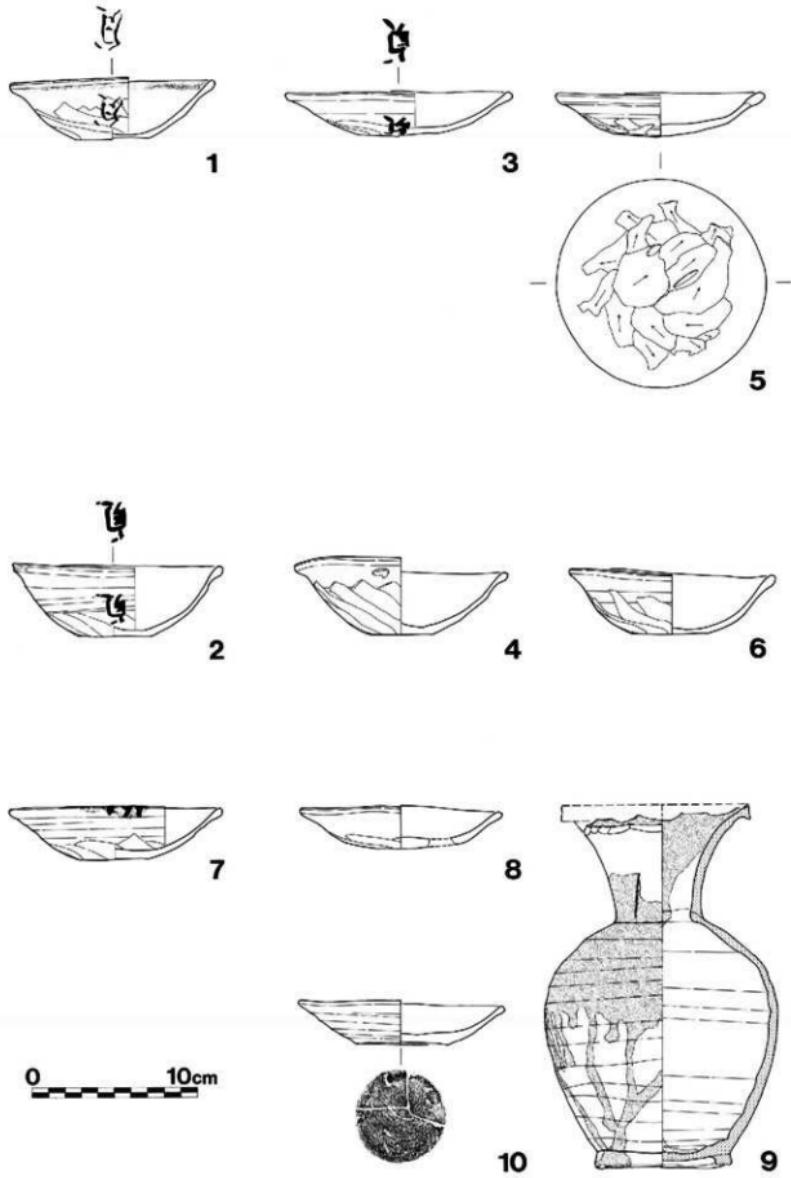


SI05・SI06 遺物出土状況(2)・同遺物実測図

0 10cm

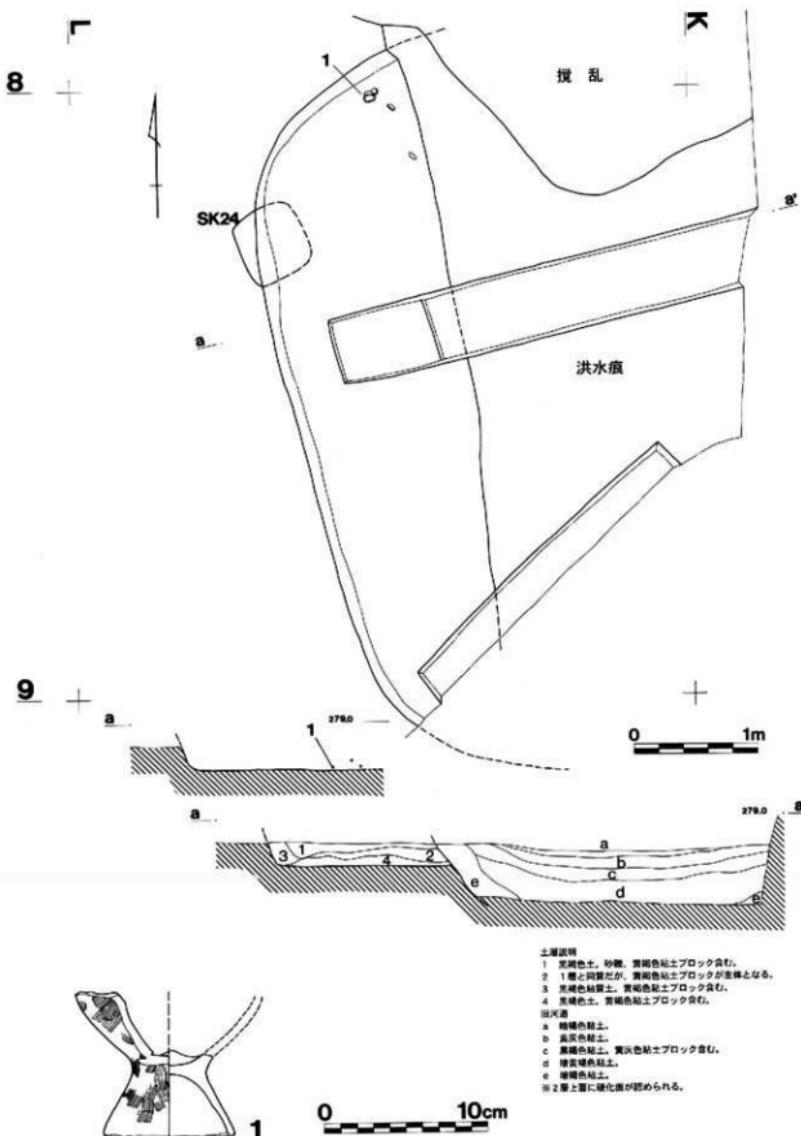
図版 14



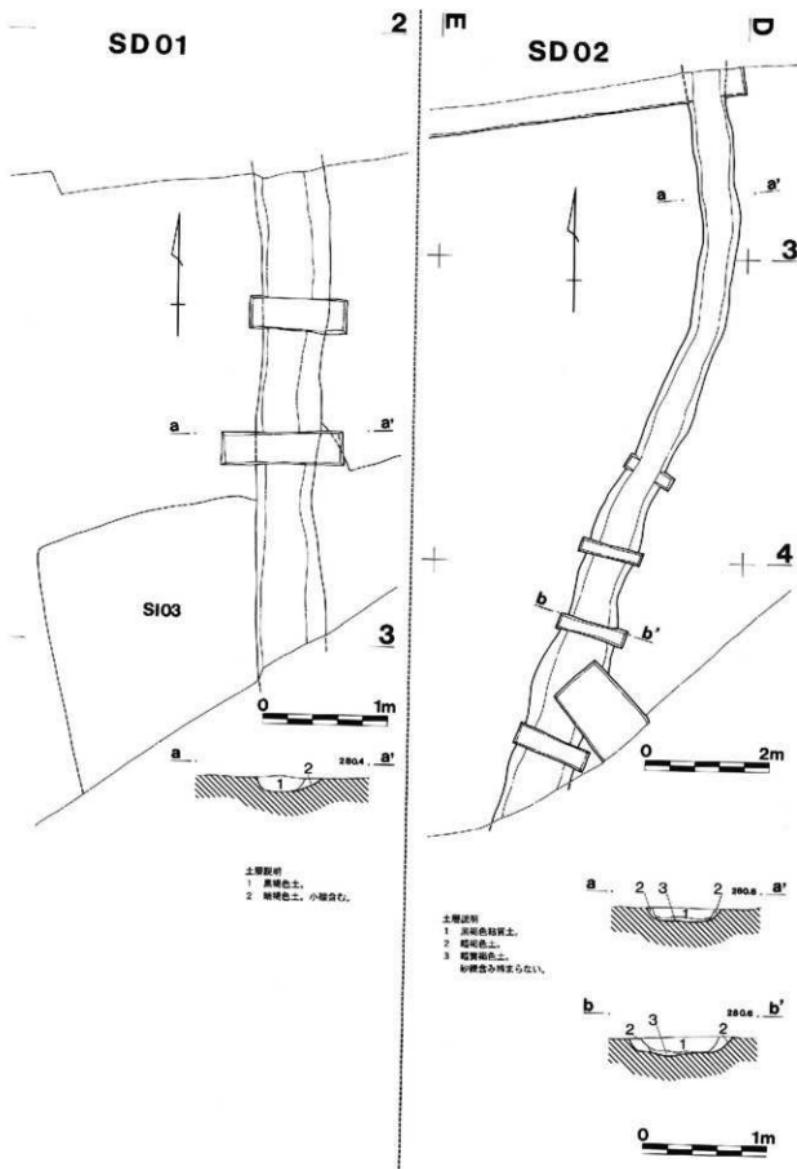


SI07 遺物実測図

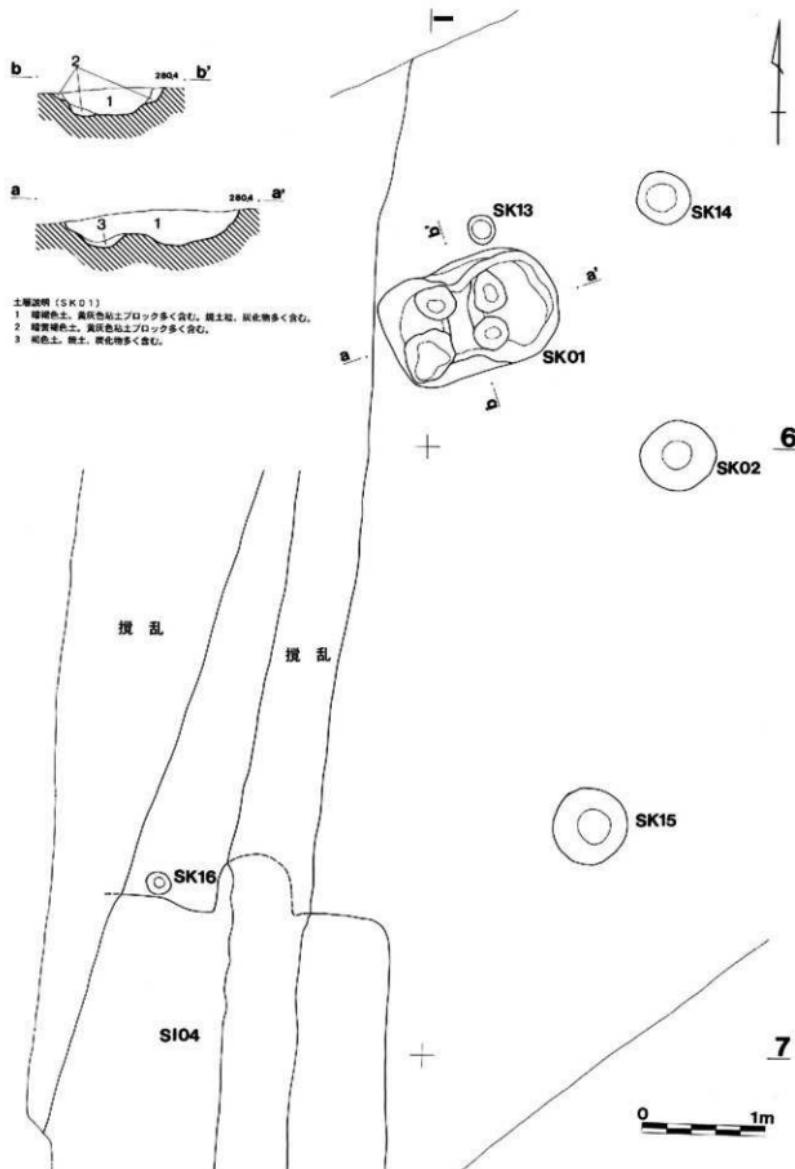
図版 16



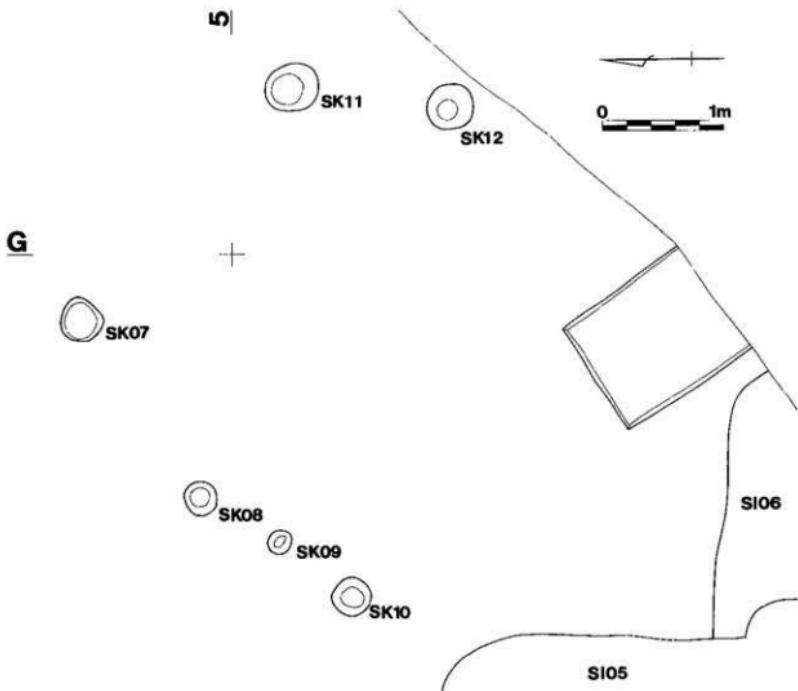
SI08 测量図 / SI08 遺物実測図



図版 18

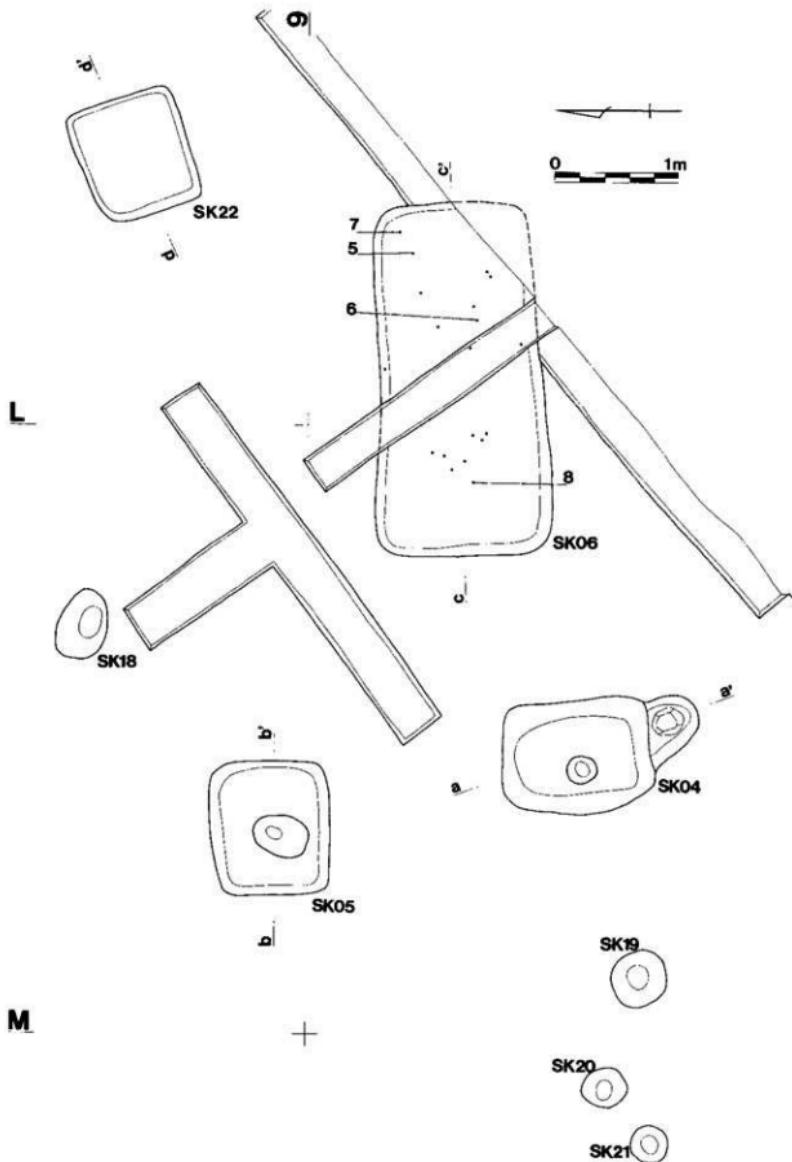


第1面 SK測量図(1)



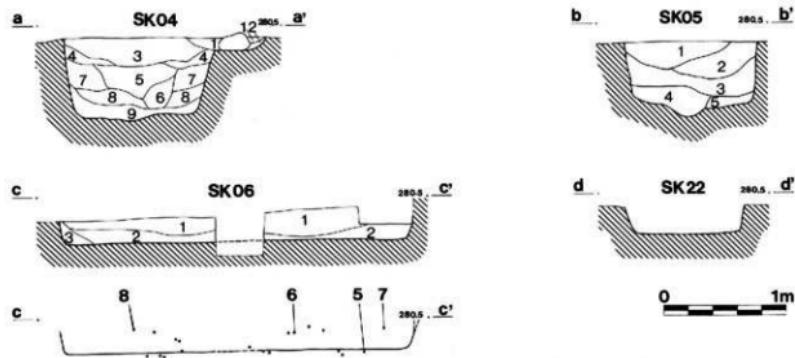
第1面 SK測量図(2)

図版 20



第1面 SK測量図(3)

図版 21



土壤剖面 (SK04)

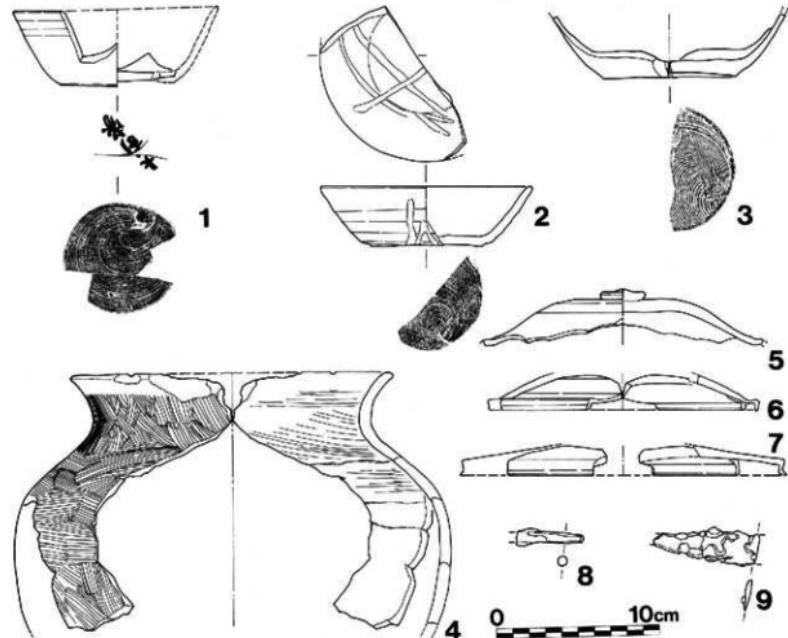
- 1 砂褐色土、砂礫多く含む。
- 2 砂褐色粘土質土。
- 3 黄褐色土。
- 4 3層と地山の黄褐色粘土ブロックの混和層。
- 5 黄褐色土。
- 6 黄褐色粘土質土。
- 7 黄褐色土。
- 8 黄褐色土と地山の黄褐色粘土ブロックの混和層。
- 9 3層と同じだが、黄褐色粘土ブロックが主体を占める。

土壤剖面 (SK05)

- 1 砂褐色土、砂礫多く含む。
- 2 1層と同質だが1層より色暗い。
- 3 2層と地山の黄褐色粘土ブロックの混和層。
- 4 黄褐色粘土質土。黄褐色粘土ブロック砂礫を多く含む。
- 5 4層と同じだが、黄褐色粘土ブロックが主体を占める。

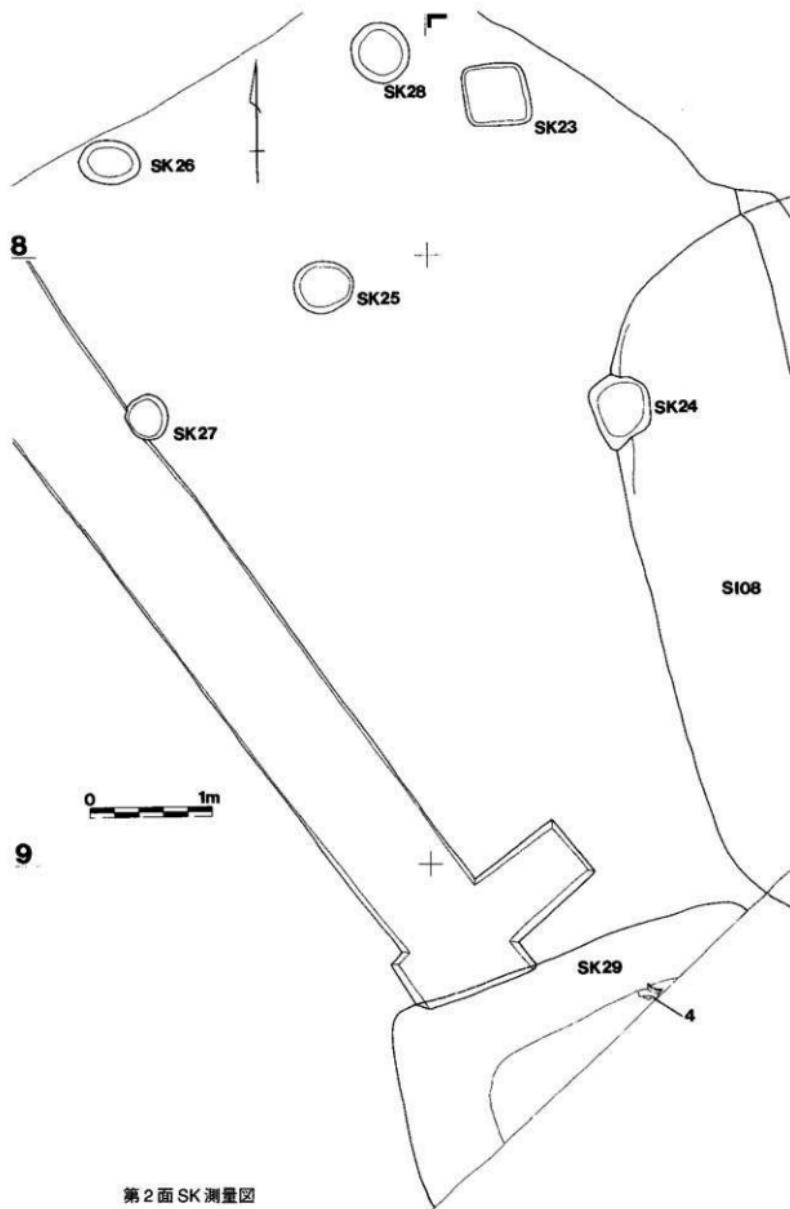
土壤剖面 (SK06)

- 1 砂褐色土、灰褐色粘土ブロック・砂礫多く含む。
- 2 砂礫を殆ど含まない1層。
- 3 黄褐色粘土質土。黄褐色粘土ブロック含む。

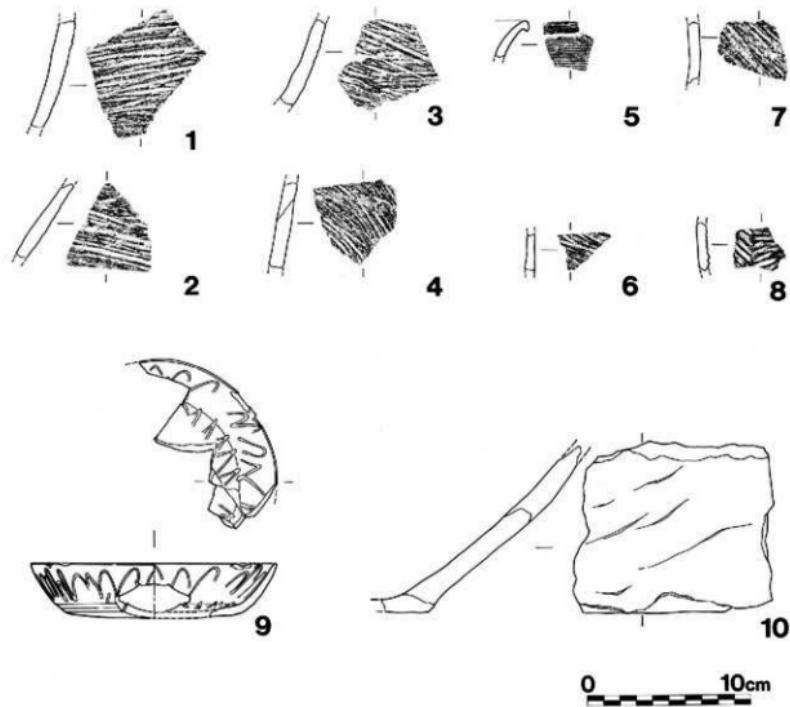


第1面 SK 測量図(4) / SK 出土遺物実測図

図版 22



第2面 SK測量図



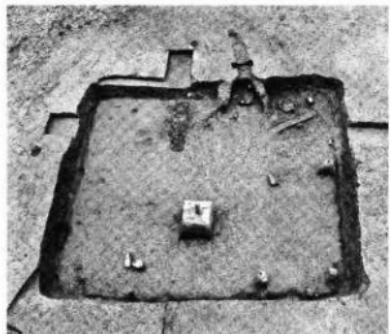
図版 24



調査区遠景(南西より)



調査区全景(写真上方はほぼ真北に対応)



SI01(南より)



SI01 潟(南より)



SI02(西より)



SI03(南より)

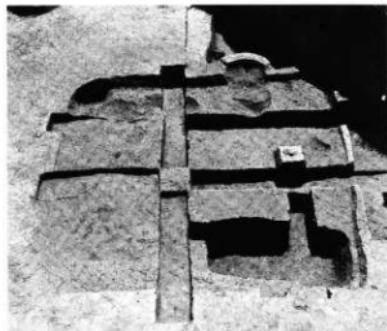


SI04(南より)



SI06(西より)

図版 26



SI05(西より)



SI05 窓(西より)



SI07(北より)



SI07 遺物出土状況(北より)



SI08(南より)



SD02(南より)

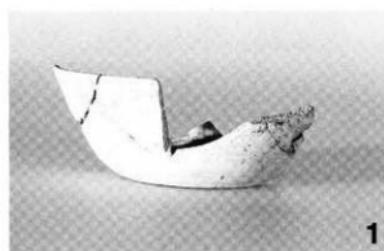


1



1

SI01 出土遺物

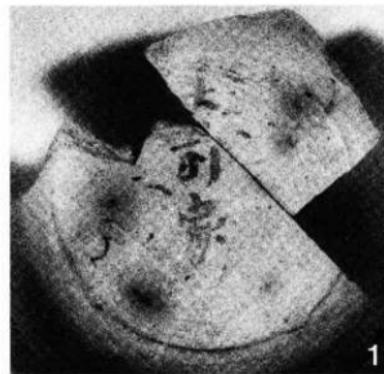


1



1

SI05 出土遺物



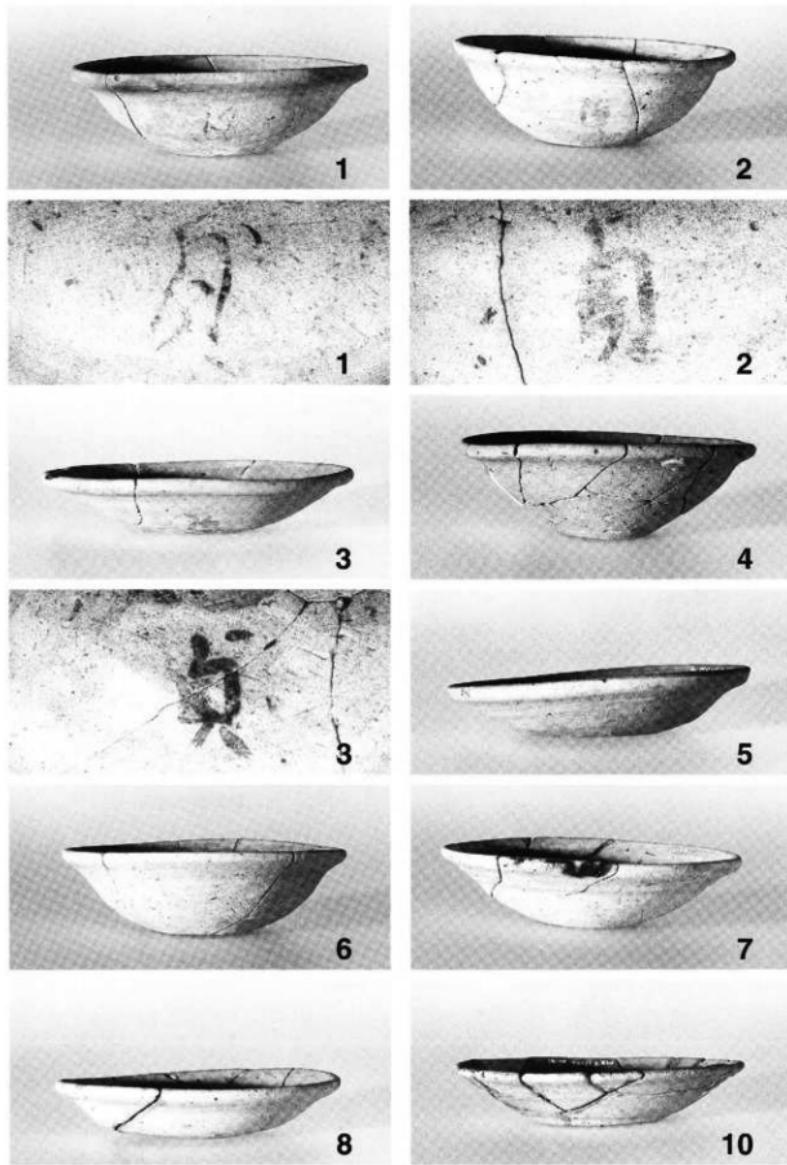
1

SK03 出土遺物



3

SI05 出土遺物



SI07 出土遗物(1)



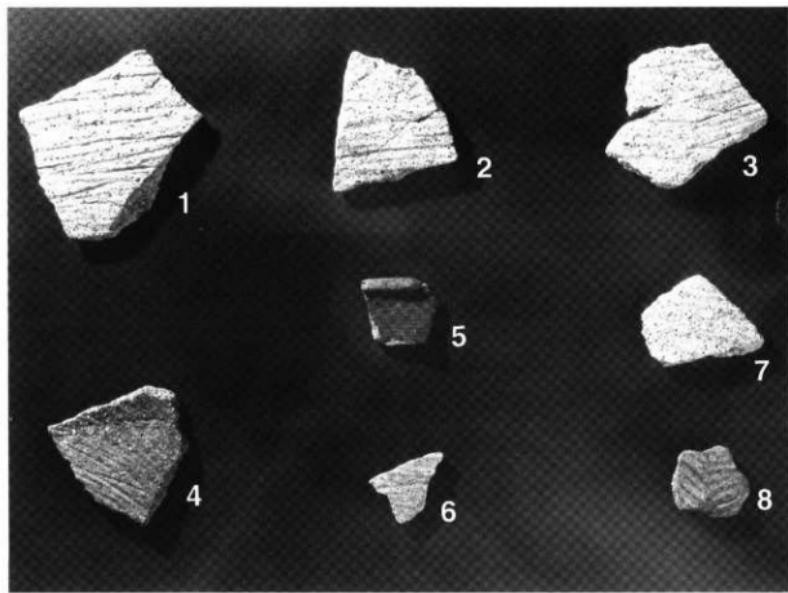
9

SI07 出土遺物(2)



1

SI08 出土遺物



4

6

8

5

7

1

2

3

造構外出遺物

報告書抄録

ふりがな	みぞろぎみちうえだい5いせき(だい2ちてん)
書名	溝呂木道上第5遺跡(第II地点)
副書名	
シリーズ	若草町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第4集
編著者	田中大輔
編集機関	若草町教育委員会
所在地	〒400-0337 山梨県中巨摩郡若草町寺部598-1 TEL055-283-8311
発行年月日	西暦2003年3月20日

ふりがな	みぞろぎみちうえだい5いせき(だい2ちてん)
所収遺跡	溝呂木道上第5遺跡(第II地点)
ふりがな	やまなしけん なかこまぐん とうかいしば 1147-2ほか
所在地	山梨県中巨摩郡若草町十日市場1147-2外
コード	市町村 19389
	遺跡 41083
1/25000地図名	小笠原
北緯	北緯 35° 36' 28"
東経	東経 138° 28' 30"
標高	282m
調査期間	19980420~19980803
調査面積	802 m ²
調査原因	道路建設
種別	集落址
主な時代	弥生時代後・古墳時代後期・奈良時代・平安時代前半
主な遺構	弥生時代後期 穴穴住居址1軒 弥生時代後期~平安時代前半 土坑29基 古墳時代後期 穴穴住居址2軒 弥生時代後期~平安時代前半 溝 2条 平安時代前半 穴穴住居址5軒
主な遺物	弥生時代土器・土師器・須恵器・灰釉陶器・土製品(轆羽口)等
特記事項	御動使川扇状地扇端部に形成された集落址

若草町埋蔵文化財調査報告書第4集

溝呂木道上第5遺跡(第II地点)

2003年3月20日発行

編集・発行 若草町教育委員会

〒400-0337 山梨県中巨摩郡若草町寺部598-1

TEL 055-283-8311

印刷 横河グラフィックアーツ(株)

〒400-8558 山梨県甲府市高塙町155

TEL 055-243-0548

